

長 埜 盛 日立の教育

著 者

一九一四年茨城県多賀郡日立村生れ。専攻は英米文学。茨城キリスト教
大学教員。一九七一年、茨城キリスト教大学学長。同年死去。著書に『英
詩形字概説』（吾妻書房 一九五八年）などがある。

本書は著者が東京高等師範に学んでいるおり、単位論文として書かれた
ものという。著者二十一歳のときである。所属は著者名の右肩に書かれて
いるのだが、抹消されており判読できない。

成立時期

一九三五年（昭和十年）八月

凡 例

- （一）原文はB4判の「北海出版社売店製」罫紙に万年筆書きである。
- （二）■は抹消文字。□は判読不能文字。
- （三）漢字は原則常用漢字を用いたが、正字と常用漢字の意味が異なる場
合は、原文のとおり正字で示した。
- （四）本文中の表は末尾に一括して掲出した。
- （五）本文中の＊は註を示す。原文において註は頭註であるが、翻刻にあ
たって本文改行後の位置に二文字下げて示した。
- （六）便宜上、本文目次に編者においてへゝ内に本書頁を示した。

参考文献

志田諱一「明治・大正・昭和初期における日立の教育」（茨城キリスト教学
園高校史学研究会『常陸史学』 一九五九年）
志田諱一「戦前の日立を考える 第1～19回」（日立市郷土博物館『市民と
博物館』第77～100号 二〇〇五～二〇一〇年）

（表紙）

日 立 の 教 育



長 埜 盛

目 次

序

一、緒 論 日立町

第一章 概 説

第二章 町民生活の重要経済資源

第一節 町民生活

第二節 日立鉱山

第三節 日立工場

第四節 其の他の工場会社

第五節 農業及び其の他の生業

二、日立の教育

第一章 日立の教育の史的考察

第一節 時代区分

第二節 明治維新前の教育

〈2〉
〈3〉
〈3〉
〈4〉
〈4〉
〈4〉
〈4〉
〈4〉
〈5〉
〈5〉
〈5〉
〈6〉
〈6〉
〈6〉
〈7〉

第三節	明治の教育	〈11〉
第四節	大正の教育	〈14〉
第二章	現代日立の教育	〈16〉
第一節	概観	〈16〉
第二節	学校教育	〈17〉
第三節	社会教育	〈26〉
第三章	現代日立の教育に対する私見	〈27〉
〈改訂〉		

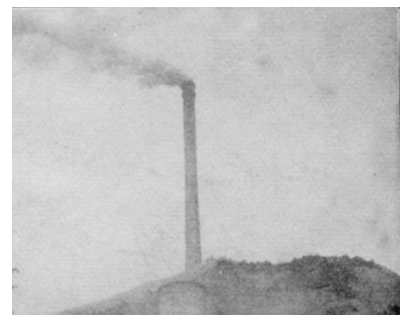
序

水戸から車窓の人となり、緑園銀川の上を北進すること四十分行り、左手に起伏の稍々はげしい阿武隈の支脈の迫るかと思れば、その一端に天空を睥睨して屹立せる灰白色の大長圓塙の、白煙を悠然と蒼空に送りつゝある雄姿を発見するであらう。此れ私の生を受け、且つ最も印象深かるべき幼年時代を育まれた、懐しき生産王国日立の守護神とも謂ふ可く、且つ其の新興の意気を完全に象徴して余りある、東洋一の日立の大煙突なのである。而して其の脚下に生を受け育まれたる町民は、之を常に畏敬と憧憬の瞳を以て望み、精神生活に於ける不断の指導標と考へ、光明を仰ぐのである。実に此の大煙突は町民を慈しむ沈黙の教育者なのである。

日立！全く其の名の如く、躍進的気分に満ち満ちたるこの新興都市日立は、その発展の各局面に、独特の活気と新鮮味と明朗性とを存分に見せてゐる。

*日立 旧水戸藩主徳川光圀、元禄八年九月十日本町鎮守神峰山奥殿に登拝の時、「旭日の立ち昇る光景の偉大なるは、藩内無二也」と嘆じたるに因る。――「多賀郡史」に因る――

以下、章を逐うて述べる所は、此の町に生を受けた私が、生粋の日立人たる特典を最大限度に迄利用し、研究家を訪れ、古老に求め、参考書籍の資を藉り



大煙突

学校の滑川・大塚訓導の諸氏に資料を戴いたことを謝す者である。又参考書籍印刷物の主なるものは、

つゝ、特に、飽くまで実地踏査を主として得たる材料を、私見を以て綴つた貧弱なる紹介的リポートである。『現代日立の教育に対する私見』の一章は、右の研究の副産物として自ら得たる皮相な批判的私見である。

尚、本研究物の作成に当たつては、日立町役場の滑川氏、日立第二小学校の助川訓導、第三小学校の山形・佐藤訓導、第四小

一、多賀郡史	一冊	旧多賀郡役所編纂
二、日立町勢一覧	一	日立町役場編纂
三、学校沿革誌	四	日立第一、第二、第三、第四小学校編
四、卒業生名簿	五	日立第一、第二、第三、第四、第五小学校編
五、教育改善方策	三	日立第三小学校編
六、学校施設経営概況	一	日立第四小学校編
七、体育雑感	一	日立地方部会編
八、職業指導に就いて	一	日立第三小学校編
九、職業実習処理法	一	日立第三小学校編
一〇、職業実習日記	一	日立第三小学校編
一一、職業指導概要	一	日立第五小学校編
一二、日立に於ける映画教育の実際	一	日立児童映画教育会編
一三、映画教育に就いて	一	日立児童映画教育会編
一四、学習映画配当案	一	日立第三小学校編

の如きものである。以上の如く可能的範圍に於て事實を常に参しつゝ独断的叙述を慎んだ積りである。

昭和十年八月二十八日

〈改丁〉

一 緒論 日立町

第一章 概説

茨城県北、多賀郡の南部に位置せるこの新興都市日立は、起伏波の如き阿武隈の支脈に懷かれ、紺碧の大洋に面したる、一山溪の畔を其の濫觴とする。太

古は谿聲の鬼氣迫る鬱々たる暗緑の樹下をせらぐ、寂たる自然境であつたであらうことは、口碑伝説に徴して想像に難くはない。この緑林の地下幾尺に秘められたる巨大なる富こそ、この仙境の運命を予言するものであり、而して彼の一小溪こそ、幾千春秋此の仙境の断えざる目撃者であり、沈黙のクロニクルであつたのである。

*山溪 現在町を貫流する宮田川
崇神天皇の朝、四道將軍の東巡あり。漸く皇化に霑ることとなり、この仙境にもほの白き黎明が訪れたの



日立町全景

である。斯くて日立の政治史の一頁は開かれたのである。即ち久慈国助川郷に属する事となり、微かなりと雖も中央政府よりの余光を仰ぐことになつたのである。ついで景行天皇の朝日本武尊の東征あり。更に中央との交渉を密にしたのである。此の時大伴部定められて、船瀬足尼を之に任ずるに及んでその管下に入り、稍々具体化された政治区域に織り込まれたのである。降つて孝德天皇の大化二年、所謂大化改新の際、郡縣法に依り久慈評と称せられ、後、茨城郡に国府が設置されるやその管下に入り、久米大夫・河原宿禰里麿等相次いで国宰となり、之が統治を受けたのである。更に降つて、元明天皇の和銅元年以来、国司の遷替繁く、政治上幾多の改変を見、遂に武士の興起に際しては清和源氏の勢力下に入り、義家東北遠征の際は、その武威に畏服し、永久年間新羅三郎義光の末なる佐竹義篤の所領となり、終に徳川幕府の創立に中央集権的封建制度基礎確立するや、御三家の中なる頼房水戸に封ぜられ、それより該藩の仁政に浴し、嚆て幕末の騒乱に至るのである。この幕末勤王佐幕の軋轢は、今尚生々しい痕を此の地に与へてゐるものがある。斯くして明治政府は、中央集権的統制政治下に入り、明治四年茨城県第十六大区三ノ小区となり、全十年第三大区一ノ小区となつたのである。而して現在の日立町を構成する二大字たる宮田・滑川の二村は夫々同十二年隣接村に併合せられた。即ち宮田村は助川村へ、滑川村は田尻村他二ヶ村に聯合し、此の状態に在ること十ヶ年、二十二年自治制の実施されるに至つて、宮田滑川の二村合して日立村と称することゝなつたのである。これより先、此の地の秘めた千古の宝庫は開扉され、この時までに異常の躍進を続け来つた日立鉾山は、四十四年、その附属機械修繕工場を分離独立せしめ、斯くしてこの鉾山工場の二大企業体を活源として、町は急角度の發展を続け、その面目を一新し、大正十三年町制は布かれ、最近十年に亙る工場の大拡張は、本町及び隣接助川町の人口の大激増を招来し、有史以来「固きえにしに結ばれ」た日立助川両町の合併は畫されて、市制の施行さへ考慮されるに至り、其の実現は今や時期の問題となつた。

*幕末の騒乱 元治年間天狗書生の騒擾

想へば往古緑樹の蔭、仙境の静寂に囁いだ彼の山溪宮田川の清流は、鉾毒に依り黄褐色と変じ、魚鼈久しく棲を絶ち、河床を削る急流は灌漑の用もなさざるに至り、囲繞する山々は、鉾山の吐く煙毒の為、荒涼たる禿山と化し、極めて殺風景なる景況を現出するに至つた。自然は斯くも惨めなる破壊を辿つた。

然し町の発展は一に鉾山の発展に在つた。今や日立町の将来は鉾山の将来を度外視して考へる事は出来なくなつた。鉾山の消長を示す町の消長は、全く敏感そのものの如く、日立教育事業史上の□変も、これに応ずる処著しいことは、後述する如くである。町を貫流する宮田川の黄濁は、実に町の血色であり、町のヴァイタリティーを示すのである。この大動脈の黄濁の消える時、即ち町の死があるのみだ。町民のこの悲壮な決意は、能く鉾山の発展に因る郷土自然の破壊の余儀なきを、黙認せしめたのであらう。一方鉾山側の理解ある態度と、町民の愛郷的熱誠とは郷土自然美の回復に向けられ、幾度か悲壮な努力は続けられ、哀しき犠牲を出しつゝ、終に五百尺の大煙突は巨体を彼の山上に現はし、又愛林運動の熱意は、衣を奪はれた山々に再び緑衣を染しむの春を齎らすに至つたのである。町は愈々進展のコースを辿る。彼の愛郷の松杉苗のすくすくと伸び行くが如くに。明治初期以後に於ける日立町戸数人口累年増加の表を見よ。

〈表1 日立町人口の推移 30頁に掲出〉

〈改訂〉

第二章 町民生活の重要経済資源

第一節 町民生活

以上に述べた如く、本町は特色ある町である。生活はサイレンに始まりサイレンに終わる労働都市である。町の海岸地方の農業地は、町の生活上副次的の性質を有するのみで、鉾山工場の住宅地に対し小菜園の役割を果してゐるに過

ぎない。

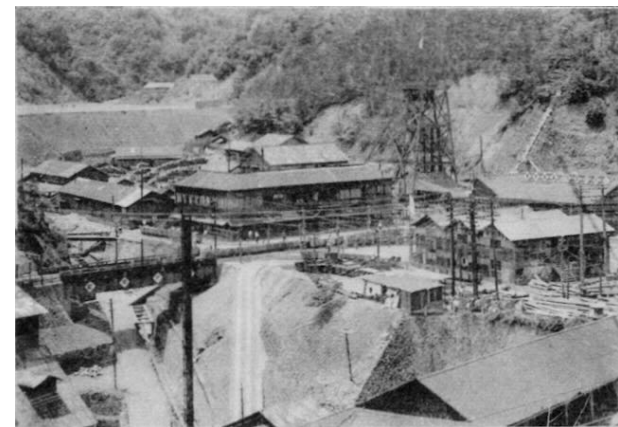
町は温和な奥羽系の人々によつて大部分占められてゐる。随つて平和な住みよい且割合にインテリの多い町である。町の特色は飽くまで労働都市たるに在る。而して無産労働者の一団とはいへ、比較的余裕ある生活をしてゐる。次に町の生活に財貨を提供してゐる諸企業体を表示しよう。

〈表2 日立町所在の会社 30頁〉

以下、節を逐ふて本町町民生活の主要経済資源に就いて略説し、町を理解する一助としたい。

第二節 日立鉾山

仙境の地下に秘められた千古の宝庫の発見は、口碑に依れば、今より四五百年前領主佐竹藩によつてなされたといふことである。然し更に明らかな記録



日立鉾山採鉱所

は、漸く徳川時代に於て現はれてゐる。即ち、文久・元治の頃、常陸の人大塚源吾衛門と称する者、水戸藩の許可を得て採掘を試み、少し許りの荒銅を得たと伝へられる。然し幾許もなくして、彼の天狗・書生二派の反目による藩乱の為、中止の已むなきに至つた。爾後久しく採掘の試みは絶えてゐたが、明治六年以降二三の鉾山人の努力によつて再び着手され、三十四年、赤沢鉾山株式会社創立されるや、赤沢鉾山と称してゐたが、三十八年十二月鉾山事業家久原房之助之を引き受けて日立鉾山

と改称した。降つて大正三年十月、久原鉱業株式会社の経営となり、昭和三年十二月、日本産業株式会社の下に採掘を続けられ、更に昭和四年四月日本鉱業株式会社によつて受け継がれ、今日に至るのである。

其の間、政治的、経済的、社会的動揺に因る事業の消長は免れず、大正十年頃には事業不振に因する従業員の大幅減が行はれ、町の人口の激減を来し、町民生活は極度に活気を失ひ、本町教育界に描いた波紋は特筆すべきものがある。而して其の後多少の消長を見て、漸次進展の歩を辿り、現在の盛を成すに至つたのである。その産出する所は金、銀、銅で、右に年産額を表示する。

金	八・九七四・三四五円
銀	一・四九九・七八八円
銅	六・七〇四・七五九円
計	一七・一七八・八九二円

又当鉱山は製錬業も兼ね、自山より産出する鉱石の外、日本鉱業株式会社経営の他の鉱山より、鉱石を集めて製錬してをり、本鉱山創始以来、一千数百の他の鉱山より買入れた鉱石量は、実に三百万トンに達し、名実共に本邦中央製錬所たるの観がある。

尚此の鉱山の営む諸種の教育事業、社会事業等の附属事業は、町民生活上大なる意義と使命とを持つのである。

第三節 日立工場

日立製作所は、日立・亀戸・笠戸の三工場よりなり、其の主体をなすのは本町所在の日立工場である。日立鉱山を母体とし、明治四十二年その附属機械修繕工場として誕生し、四十四年、母体より分離独立して活動を開始したのである。現在の本町山手工場がそれである。爾来事業は急旋廻の発展を遂げ、大拡張の已むなきに至り、現在の海岸工場を増設するに及び、今や資本金二千万



日立製作所山手工場

円、従業員一萬を擁する大企業体となつた。その発展実に見覚ましく、更に増資大拡張の機運に際会してゐる。外国人の援助を排し、専ら日本人のみの頭脳と技術と資本とを以て、欧米先進会社と雄々しく角逐して、工業日本の為に万丈の氣を吐いてゐる。今や、町の運命を左右するは鉱山に非ずして工場であらうとさへいはれる活況である。其の製作する所は電気諸機械器具、蒸気タービン、蒸気汽罐エレヴェーター及び電線等である。年製造額実に一二・〇〇〇・〇〇〇円である。特に近年の非常時局に際し軍需品製造に一層活気を呈してゐる。

尚鉱山と同様に、附属的経営たる、教育上、社会上の諸施設は、之亦町民生活に於て、看過すべからざる重要性を有つてゐるのである。

第四節 其の他の工場会社

上述のもの外、工場会社の主なるものは、日立電力株式会社・水濱電車株式会社日立営業所、及び日立助川両町に跨る常陸セメント工場等である。その重要性に於ては、前述の鉱山工場のそれに比しては問題にはならない。然し町民生活を概観する時、看過できないものがある。

第五節 農業及び其の他の生業

日立に於ける農業は旧滑川村及び宮田村の海岸地方に於て小規模に行はれてゐるのである。消費者たる鉱山工場の従業員は、米穀を鉱山工場の経営する日

用品供給所に仰ぐが故に、従来の主穀農業を捨て、野菜、花卉、果実の栽培に力を入れてゐる現状である。而して農家の子弟も、近時多く工場等に於ける労働を志望するやうになり、本町に於て農業を主業とする生活的不安を如実に物語つてゐる。農家の子弟のこの傾向は、又工場労働者のインテリ生活に対する魅力に因する所も相当多い。

本町海岸に於ける水産業は主業としては盛んではないが、農家の副業として稍々行はれてゐる。遠洋漁業は殆ど行はれず、沿海漁業に限られてゐるやうである。

農水産物産出実況は左表の如くである。

一、農 業	一一六、〇六五円
米	四五、四三〇円
麦	二四、三六二円
蔬菜並花卉	二一、七六七円
甘 藷	五、〇二五円
杉 苗	五、〇〇〇円
蒟 蒻	三、七〇六円
其 他	一〇、七七五円
一、水産業	一、七六〇円
鮑	八四〇円
海藻類	九二〇円

商業は、人口数万の一大消費地であるに拘らず、一向相応の発展を遂げてゐない。なぜならば、前記の鉱山工場に於ては、日用品の供給所を町内数ヶ所に設置して、極めて良質廉価なる物品を従業員に配給してゐるからである。随つて大商店と称すべきものは少い。然し従業員外の顧客を相手とする取引も相当行はれ、一般的に概観すれば活況であるともいへよう。

〈改訂〉

二 日立の教育

第一章 日立の教育の史的考察

第一節 時代区分

日立の教育の重要性和特殊性は現代に存する。それは上記の日立町勢の進展に徴して明白であろう。故に日立の教育を史的に考察するに当り、現代を過去史と章を更めて説述した訳である。

日立の教育を史的に取扱ふ為に、次の如き時代区分を考慮してみた*。

* 学校沿革誌を少しく参考にす。

第一期 明治維新前の教育 (太古……明治初年)	
一、黎明期 (平安初期以前)	
二、漢学時代 (平安初期……室町末期)	
三、寺院教化の黎明時代 (室町末期……戦国時代)	
四、儒学時代 (徳川時代)	
第二期 明治の教育 (明治初年……明治末年)	
一、明治初期 (明治初年……二十五年頃)	
一、明治中期 (二十五年頃……三十八九年頃)	
一、明治末期 (三十八九年頃……末年)	
第三期 大正の教育 (大正初年……大正末年)	
一、大正前期 (大正初年……十、十一年頃)	
一、大正後期 (十、十一年頃……末年)	
第四期 現代の教育 (昭和初年以降)	

右の時代区分は、極めて暫定的便宜的なもので、必ずしも学的根拠を有するものではない。唯以上の如く区分することに依つて、日立の教育を、より系統的に、より容易に考察し得るではないかといふ考へに基いたものである。

第二節 明治維新前の教育

本町の教育史実を探索する上に、最も困難を感じるのは徳川以前のそれである。兎に角、大宝令時代国学の設置があつて以来はじめて具案的、目的的教育、即ち狭義の教育が行はれたではないかと思はれる。然も其れは特権階級のみ施されたもので、国民文化の開展と、諸民の自覚と相俟つて、教育の機会均等化へと進行し、平安初期に至つて稍々庶民教育の濫觴を見、寺子屋・家塾教育も漸く幼稚な形態に於て出現し、室町末期より所謂文京暗黒時代に際会しては、文教は貴族僧侶等の特殊階級の手へ歸したが、本町にては、幸に寺院の開山あり、学校的教化の光明を迎えると同時に、庶民教育への拍車が掛けられたのである。次いで、世、徳川幕府の統制下に入るや、文教燦然として勃興し、日立では水戸藩の仁政下に相当な教育事業が行はれることになつたのである。斯くして私塾教育の隆盛は、徳川幕府の動揺を招来し、皇政復古の大業の成るや、庶民私塾教育、藩学教育は完全な国家的劃一教育へと化するのである。明治維新前の教育を便宜上左の四期に分けて考察したいと思ふ。

一、黎明期（平安初期以前）

特権階級の子弟のみの教育が行はれた時代

二、漢学時代（平安末期……室町末期）

庶民教育の擡頭した時代

三、寺院教化の黎明時代（室町末期……戦国時代）

杉室大雄院の開山、寺院を中心とする教化の行はれた時代

四、儒学時代（徳川時代）

水戸藩の癡学に文教華やかなりし時代

以下、概説的に各期に於ける教育事実を略述してみよう。

（一）

黎明期（平安初期以前）

大宝令時代以前に於ては日立及び附近に行はれたる教育史実を考察すべき確たる文献の徴すべきものは殆どない。恐らくは、此の期にあつては、中央政府の政治的教化はあつても、教育的な地方施設は殆ど行はれてゐなかつたであらう。思ふに、此の期の教育は広義な意味に於てのそれで、即ち生活的、生業的な家庭訓育に僅かに認め得たであらう。中央に於てすら、真の意味に於ける具案的、目的的教育は未だ完全な形態をとつてゐなかつたと思はれる。

大宝令時代、始めて教育の制定められ、地方には国学が、地方政治の中心たる国府に設置されたのである。これ、地方に於ける具案的な目的的教育の誕生である。然しこの時代に於ては、社会機構、即ち氏族制度の性質上、今日の如き教育の超階級の機会均等は望まれなかつたのである。此の国学は、国司の管掌する所で、郡司の子弟等即ち特権階級の子弟のみを教育する学堂であつた。本町の所在常陸は、大國の格であつた為、国学学生は五十名であつた。当多賀郡及び本町の教化上に、国学の及ぼせる影響は如何なるものであつたかは、詳細な記録絶無の為、推断を許されない。兎に角、當時の常陸に於ける国府、今の新治郡石岡町に、郡司の子弟は、遙々笈を負うて到り、この教育施設の恩沢に浴したことであらう。此の国学の目的は、官吏の養成であり、而も前述の如く特権階級の子弟の為のみの教育機関であつたのである。歴史の明示する如く、教育事業の發展は、教育の機会均等化への發展と同一義である。してみれば、此の期の教育史実の物語るものは、教育事業の幼年期の姿に過ぎぬ。

然し兎に角教育の慈雨は社会の上層に先づ浸潤することゝなつたのである。

歸した。

(二)

漢学時代 (平安初期……室町末期)

民間に於ける教育は、その始め、洋の東西を問はず宗教との密接な關係に於て誕生し生長するものである。平安初期、天長八年僧空海の中央に綜藝種智院を創設するや、こゝに我国庶民教育の嚆矢を見るのである。此の影響は漸次地方にも及び、寺院を中心として、其の布教と相俟て庶民教育の勃興進化を来し、所謂寺子屋教育の発生となつた。日立に於てはこの期には寺小屋教育の見るべきものはなかつたが、鎌倉中期民間宗教の黄金時代に於ては、相当の影響を受け、斯くて民間に於ける学識者を生み、且仏教の地方普及は、修験者の巡行を繁くし、又医術の漢学との關係は、漢学に造詣の深い医師を生み、学識者、修験者、医師等の當時に於ける知識階級は、共に庶民教育²⁵に與る事となり、家塾教育もこゝに胚胎するに至つた。然し未だ具案的組織的な完全な家塾教育ではなかつた如くである。これが完全な形態をとるのは少くとも徳川時代に入つてからであらう。

以上の外神官を中心とする幼稚な民間教育の行はれたる事は、想像に難くはない。これには対仏教的な色彩を帯びてゐたことも想像されるが、水戸藩の治下になつて始めて猛然と対仏教的挑戦を始めるのである。

此の期の教育は漢学を主としたものであることは、教育の主体が僧侶であり、医術者であつた事によつても推察されるが、この漢学主義が徳川時代に入つて、一方儒学の隆盛を誘起すると同時に、他方に於て国学、国文学の反動的勃興を招来するものであらう。

然し漸く芽を萌え出した庶民教育も、公卿の失権と武家の興起とに依つて、再び厚い土層を被ることゝなつた。戦乱相継ぎ、武術の傳授訓練のみ重とし文事には意を用ひず、学問教育は、再び貴族、僧侶、及び特殊な武家の占有に

(三)

寺院教化の黎明時代(室町末期……戦国時代)

室町末期以後、徳川幕府の確立に至る約一百年間は、政治史的には全国的無政府状態であり、概観すれば、文教上の暗黒時代である。下剋上の風潮は、天下を完全に圧し、勢力ある野心家は地方に割拠し、互に相克し、地方民間教育は、極度の沈滞を示すに至つた。然るに、之より少く先、日立はその教育史上特筆すべき光明を迎へたのである。即ち、相模の人、星某、相州足柄上郡南足柄村、曹洞宗の名刹大雄山最乗寺の八世となり、南極寿星禪師と称し、洞門五哲の一人であつたが、後土御門天皇の文明二年、現在の日立附近に遊び、隣村田尻の度志山觀世音の堂に参籠中、夢想に依り、緑の仙境、翠壁の山溪宮田川の上流、人気なき杉室の山中の蒲団岩の上にボウ庵を結んで、常に禅座することとなつた。山ノ尾の城主、小野崎山城朝通、其の高風を慕つて歸依し、杉室の地五十余町歩を喜施して、この仙境に七堂伽藍を建立せしめ、之を天童山大雄院と号した。『地幽絶にして殿堂樓閣倉廩廊廡絡繹輪奐²⁶』形容に、當時を彷彿するものがある。

*多賀郡史に拠る。

此の寺院の創立は、本町教育史上の一大漂石と考へられよう。この巨刹を中心として、教化の慈光はこの地方に啓蒙教化の輝きを放つたことであらう。此の寺閣に集ふ修験者達は、好学の士民に樹下石上諄々と教へ諭す所があつたであらう。

天正三年九月、大雄院九代の法孫吉山元利禪師、豪族小野崎氏の懇請を受け、現在の本町字滑川に境内七百五十五坪の末寺梅雲山觀音院を開山した。かくて現在の日立町を成す二大字宮田滑川の文教は、夫々此の両刹を中心として、愈々生氣を加へるに及んだ。

世は戦国時代の乱世、文教暗黒時代とはいへ、この寺院教化の聖光の愉悅に

浸り得る幸運を迎へたのである。

* 本郡にては佐竹、岩城の争乱時代である。

(四)

儒学時代 (徳川時代)

家康の儒学奨励、綱吉の好学は、必然地方にも其の影響の跡を見せてゐる。当時、中江藤樹・貝原益軒・伊藤仁斎・物徂徠等の儒学教育家起り、又幕府は朱子学を正学として文教の刷新を計つた為、儒者を中心とする教化施設事業、地方に勃然として起り、日立の所属せし水戸藩に於ても、英主光圀等の奨学に刺激されて、地方文教に於ては遙かに他藩をリードするものがあつた。

彼光圀の思想は、敬神尊王をその根源に置く。随つて彼は領内の寺院を銓衡して、其の由緒の正しく明らかならず、徒らに民財の削磨を事とする寺院を廃せしめた。この排仏思想は、後主斉昭に至つて更に熾烈となつて再燃するもので、仏教は水戸藩内にあつては、迫害されて惨めな状態に在つた。

然るに、こゝに注意すべきは、日立杉室の大雄院に対する光圀の態度である。彼は偉大なる教育愛護者であり、教育政治家であつた。特に熱心なる道德教育の奨励者であつた。排仏思想を攘□人であるとはいへ、濫りに寺院を毀つことはせず、由緒ある寺院を保有した事は、実に彼の慧眼を物語るものである。彼は寺院の庶民教化に貢献する所大なるを忘れなかつたのである。即ち杉室大雄院の二十世連山交易禅師の時には、彼は屢々駕を枉げてこの仙境に清遊し、禅師と禅を談じたのである。公一日即興に筆を馳せて一詩を賦したことがあつた。これ当時の日立杉室の幽絶を美しく描くものであらう。

探幽遊勝地。 一塢白雲中。 仏殿莓苔鎖。

僧房煙霧濛。 水流皆示寂。 山靜即觀空。

高踏道元跡。 基開南極功。 慇懃招我致。

邂逅話禅濃。 愜意叩韓氏。 論玄仰宝通。

曾望方外月。 常奉大乘風。 要煮白芽茗。

頻燒紅葉楓。 偷閒忘世事。 随処洗塵蒙。

借四大牀坐。 不知永夜終。

寛文延宝の頃中秋年五の夜、光圀を中心として儒臣医官等を会し、大雄院奥書院に所謂山寺の観月を催し、詩戦佳境に入つた時、

山寺見月 連山

寺住横峰倒嶺中 夜深由月辨西東

嬋娟清影明於晝 此景此時吟興濃

和韻 光圀

憩息大雄禅院中 金波忽動海東東

興闌共醉紺園月 般若一湯佳味濃

連山も相当な善知識であつたに違ひない。

要するに、光圀は由緒ある寺院に対してはその教化上の功を認めたのである。彼の領内に於ける孝子貞婦の表彰は、余りにもよく知られてゐる所で、彼の道德教育に対する事蹟は挙げるに遑なき程である。

更に彼は地方の寺小屋家塾の教育の上に、大なる貢献をした大恩人である。即ち大日本史編纂の為、其の領入の五分の一を投じてその資に充て、碩学の士を招聘厚遇した故、水戸を中心として藩の文教燦然として起り、藩内の家塾、寺小屋教育の隆盛を来したのである。この庶民教育の隆盛は、將軍綱吉吉宗の奨学により、更にも彩りを加へ、宝暦の初め、日立の北、隣藩松岡藩の学者鈴木玄淳は、『百姓日用訓』を著はし、庶民教育の教科書として尊重せられた。水戸藩にては光圀・治保・斉昭等の明君相継ぎ、謂水戸藩風の醸成となり、水

戸学の大成へと進んだのである。即ち水戸の弘道館は斉昭の創設した藩学であるが、藩内のみならず、全国幕末尊王志士の覚醒への大警鐘は、此処に於て乱打されたのである。日立附近に於ける藩学には、北に隣藩松岡藩の就将館、南に水戸藩助川の時館あり、郷学には、南に大久保の暇修館あり、私塾には、北に松岡の鈴木玄淳塾・阿久津塾及び惜陰塾等があつた。以上は日立を圍む著名な学校で、此の頃日立の好学の青襟は、これ等の学塾に笈を負うて集うたのである。

日立に於ては寺院・神官・医師・修験者・浪士等の営める、程度の稍々低い、且つ教化区域の狭い寺小屋・私塾は数ヶ所に在つた。主なものは、

寺小屋 旧宮田村 大雄院 生徒二十余人

旧滑川村 観音院 生徒十四五人

家塾 旧滑川村 石井寛淳宅 生徒十二三人

旧滑川村 根本又仙宅 生徒十人

因みに石井氏は神官であり、根本氏は医師であつた。

左に日立村に於ける寺小屋私塾に就いて、記録を参しつゝ略説してみよう。

寺小屋及び私塾に於ては、其の学童を筆子と称し、普通七才で坊入即ち入学し、十二三才まで修学するのが通例であつた。坊入は吉日を選んで、父兄子弟共に礼装し、机文庫を用意して至り、師に厚くその子弟を依頼し、酒肴並に赤飯を持参して祝杯をあげ、古参の筆子には、赤飯又は菓子等を配つて坊入の披露を行ふのである。彼等学童は、全く家庭的な雰囲気の中に勉学し、而も子弟長幼の節度正しく、多少嚴肅主義的な点も見られたらしい。師に対する謝礼は、盆及び歳末に若干の全品を贈るのみであつた。此の時代に於ける塾童及び其の父兄の対師感情は、真に涙ぐましいものがあり、今日の教育界に良い参考となるものがあらう。即ち『弟子三尺下りて師の影を踏まず』といったやうに、師を『御師匠様』と称して、崇敬嗇ならざるものがあつた。師家に事あれ

ば直ちに相携へて赴き、労役あれば馳せ参じて薪水の手伝をもし、新穀が実れば先づ土に捧げ、時折の野菜は勿論、山家の者は薪を、海辺の者は魚介を贈り、和氣父子の如きものがあつた。師の鞭苔は愛の処罰と信じ、児童は怨まざ、父兄は毫も意に介しなかつた。知育に於ては甚だ幼稚なものだつたかも知れぬが、訓育の徹底振は今日の教育事^(マ)實際家の学ぶ可きものがあらう。此等の私塾に於ける教科目は、読書^{*}手習を主とし、算盤は、青年になつてから、別に算者と称する者に就いて習得せしめた。学習の實際は、特に手習に重点を置いた。即ち一日に反古数冊を習はせ、手本は師匠の肉筆で、其の教材は以呂波・数学・干支・名頭・村名・国尽・商売往来・千字文等であつた。次に読書は、大概素読で、教科書は『今川古状揃』『庭訓往来』『実語教』『百姓日用訓』『孝経』『唐詩選』及び四書五経等であり、女子の爲には、『女今川』『女大学』『百人一首』『古今集』の類いを交へた。又筆子の中に、特に俊才又は好学者があれば、更に進んで『史記』『左傳』『漢書』『文選』等を読ましめ、経義を講義した。此の程度にまで達した筆子は、大抵その塾を辞し、名儒の塾に転じ、内弟子となり、或は通学するのである。日立では多く水戸に上つたらしい。特に弘化・嘉永の水戸学風華やかなりし頃、碩学藤田東湖の出づるに及び、其の下に遙に笈を負ふ者が少なくなかつた。さて、家塾・寺小屋に於ける教授法は、今日の如き合同教授ではなく、親切な個別教授で、読書は二三人づつ交代に師の前に出て教導を受け、手習は、初学者には手を取つて運筆の法を授け、その他は専ら練習せしめ、特に情書^(マ)に重きを置いた。学童の管理には、上級年長の筆子に命じて師の補助をさせた。休日は、普通朔日・十五日・盆・正月で、農繁期にも亦特に休業した。通例午前八時より午後三時まで勉学をしたやうである。

* 読書、手習の中に修身作文を含んだ。

* 三六頁十三行参照

* 当時の時称で言へば「午前八時は辰刻」「午後三時は未刻」

又当時の富豪名家では、家庭教師を抱へてゐたものが相当あつた様である。

斯く師を聘するには月々白米一升と鑿百文を謝礼として贈つたさうである。

要するに、此の期に於ては民間に於ける子弟の教育が、封建政治の確立の結果、英主を得て異常な発達をなし、藩の主義の下に統制されるに至り、日立の如きも、同様に寺小屋・家塾の合理的発展を見たのである。而して義公以来脈々として流るゝ水戸学の精神は、烈公に至つて完全な形態に於て現はれ、實際化され、維新の大偉業の原動力を提供したのである。日立の該藩内の一村落として、その塾教育に於て、この水戸魂の叩きこまれたことは蓋し当然である。

世は聽て尊王攘夷、開港、佐幕の叫喚は騒然となり、我が水戸藩の如きは御三家の一とし、又尊王攘夷藩として苦境に陥り、藩論の二つに分れて、遂に、元治年間に於ける天狗諸生両党の挙藩的騷擾となつた。天狗党は尊王攘夷を、諸生党は佐幕を夫々標榜して起つたのである。この二派は、由来、藩学に於ける学派の対立反目に因をなして、水火の如く相容れなかつたのである。而して我が日立の領主助川城の山辺氏も、此の争乱に捲き込まれ、随つてこの地方の庶民教育も一大危機に類したのである。この天狗諸生の争乱は、元来学派の争である故に、藩内に於ける学塾は、多かれ少かれ此の争乱に躍つたのである。

斯くて世は明治の世となり、廃藩置縣の実成り、本藩の教育も、面目を一新すべき一大転換期に直面したのである。即ち教育界は藩学時代私学時代より、国家的統制教育時代へと進むのである。

第三節 明治の教育

日立の教育は、明治於て漸く発展の準備を完成し、大正・現代と其の華やかな発展期に入るのである。故に日立に於ける明治の教育は、漸移的・準備的な性質を帯びてゐるものと考えてよい。

全国的に概観すれば、此の期の日本教育は、政治的変改と殆ど並行して、大刷新の行はれた時で、日本教育史上、大きな開展を見せてゐる時代である。即

ち明治四年七月、文部省設置せられて、全五年八月学制の頒布を見、封建的、即郷土的庶民教育は、中央集権的統制下に移り、国家的劃一教育へとその姿相を更へて進んだのである。而して階級門閥を超越せる教育の機会均等の思潮は、超階級的、国家的就学強制となつて具現し、庶民教育の眞の黎明が訪れた如くであつた。然るに、明治新政府の此の国家的劃一干涉主義教育は、幾許もなくして、果然反動を招来し、国家的劃一干涉主義に対する反対の烽火は、地方教育家間に猛然と燃え上り、遂に政府の積極主義政策は放任主義的自由教育の一般的動向に屈するの已むなきに至り、十二年九月事実上学制の廃止となり、自由放任主義を取ることとなつた。之は実にスペンサー等を中心とする英国自由教育主義思潮の影響に依るものと解せられる。然るに、十九年森有禮の文相となるや、この非干涉的自由放任主義を一擲し、国家的劃一干涉主義教育は再び我が国教育界を支配することとなつた。一方政治上に於ては、国民の自覚愈々進み、自由民権のデモクラシー的思潮主義は世に喧伝され、二十二年、帝国憲法の発布となり、又国民思想上にては、急激なる欧化主義は遂に新旧思想の衝突混乱を惹起し、我國民思想史上、稀に観る動揺を現出し、國民道德の真相は疑はれ、斯くて二十三年、教育勅語の煥発となつたのである。此に於て、教育界は此の聖勅に対する感激と敬虔とを以て、著しく活潑となり、國民教育の動向も略々一定せる如く見えた。而して二十五年彼の教科書事件起つて、国定教科書制定の要望熾烈となり、遂に森文相の企図せる国家的劃一干涉主義教育は、国定教科書の制定を機に具体化されることとなつた。斯くて明治新政府の国家的教育主義の抱負は漸く形態を整へ、國民的試練の前に戰時的緊張の明治中葉の教育活動へと進展するのである。明治中葉の教育を彩るものは、勿論戰時的な緊張であるが、教育に於ける形式論の重視も、看過すべきではない。之は教育の能率主義的傾向を表示するものであらう。即ち此の期の教育界は全くヘルバルトの教育説に風靡せられ、所謂五段教授の紹介となり、形式的な教授法の研究が旺盛となつた。此のヘルバルト狂時代は狂歌をさへ生んだ位であつた。

明治末期の教育は戦後的色彩の濃厚な時代である。日清日露の両役は日本をして急激に世界の日本の位置にまで押し上げてしまった。ここに於て大国民として恥づかしからぬ教養の完成は、国民教育の急務となり、四十年義務教育年限を六ヶ年に制定することとなり、高等小学も三ヶ年の延長を見るに至った。一方教育思潮の動向は、ヘルベルトの心理学的倫理学的教育説に対する反動□然と起り、社会教育・実教教育・自然主義の諸教育論の勃興を見、形式主義の重視は其の反動として人格教育・理想主義教育・自由教育・想像教育等の諸教育思潮の擡頭を招来した。

明治に於ける日立の教育を考察するには、明治維新前のその如く、教育の全国的動向に無関心であり得ず、全国的動向を常に背景に置いて考察するの已むなきに至った。なぜならば、此の期の地方に於ける教育は、前述の如く政治的変革と併行して、中央政府の統制下に入り、国家的劃一教育時代へと入ったからである。故に以下略説する所は、前述の教育的動向の裡に動いた日立の教育界である。本町の明治の教育を便宜上左の三期に分けて考察したい。

一、明治初期（明治初年………二十五年頃）

日立に於ける小学校教育の誕生時代

二、明治中期（二十五年頃………三十八九年頃）

戦時的緊張時代

三、明治末期（三十八九年頃………末年）

戦後の教育

（一）

明治初期（明治初年………二十五年頃）

尊王佐幕の争乱は、大勢の決する所となり、戦塵漸く静まり、遂に王政復古の世となった。教育上に於ては、一大刷新が行はれ、洋式教育への転進が試み

られた。即ち明治の先覚福沢諭吉等の日新的教育主義思潮は、政治的大革命期に在った国民の文化生活上に、大なる波紋を描き、国民文化の全面的欧化主義の動向に拍車を掛け、教育の如きも一種の金儲的ビジネスの如く考へられるに至り、古ギリシヤのソフィストの如く、教師は給料を得て知識を売る一職人とも目せられる程の急旋廻を見た。而して明治新政府の努力は、常に日進月歩に在り、且国内文化の中央集権的統一発展を以て、国力の涵養を期した故に、教育制度の思ひ切った大改革は種々劃策され、従来の如き儒教主義教育への反省を以て、郷土的、地方的なる自由私学の撤廃の叫びとなり、遂に明治五年学制の頒布を見、欧化主義的国家的劃一教育の大標石は置かれた。

これより先、日立にては飢饉の対策として、町内各所に設けられた水戸藩の十石穀倉を、大政奉還と共に空倉となつた為、臨時の学舎として使用するこゝとなり、従来の寺院に於ける寺子屋教育及び私塾の教育と相俟つて、本町庶民教育に貢献する所が多かつた。斯くして学制の頒布せられるや、前述の穀倉假学舎・寺子屋・家塾等を撤し、新に制定された小学校に児童を収容する事となり、従来の教育は刷新せられ、空海以来唱へられた教育の超階級的機会均等も、漸く明治新政府の普通教育策に実現の曙光を見るに至った。即ち日立にては、旧宮田村に佐藤理左衛門氏の居宅を借受け、該博舎と称して開校することとなり、斎藤維民三十余名児童を此処に集めて教鞭を執ることとなった。旧滑川村では、観音院に児童二十余名を収容し、石井磊三が教導に当ることになった。之、日立に於ける小学校教育の萌芽である。上記の二学舎に於ける教育は、未だ儒学時代の私塾気分を脱しきれなかつたに相違ない。或意味に於て私塾時代の延長ともいへたであらう。さて、彼の二学舎は、後各々宮田小学校、滑川小学校と改称され、佐藤敬忠翁、小学区取締となった。十年二月、滑川小学校は宮田小学校に併合せられたが、後、再び分離し、十二年新教育令の發布せられるや、小学校制度の一変を見、日立にては小学校の修業年限を一ヶ年として授業料を徴収することとなった。斯くして漸く小学校の體裁を具へることとなった。十五年十一月に於ける日立の小学区の状態は左の如くである。

*該博舎 日立第一小学校の濫觴である。

第卅一番区 滑川村 人口 八八〇人
第卅二番区 宮田村 人口 一一三八人

これより先、四年七月に頒布せられた学制は、就学の強制を意味し、階級的
教育思想の反省に貢献する所があつたが、この中央集権的劃一干涉主義に対す
る猛然たる反動起り、事実上政府も地方教育を自由放任の状態に置くの已むな
きに至つた。然るに、十九年我国教育政治史上の一大偉才、森有礼の文相とな
るや、この病的反動思潮に対するに、再び統制的干涉主義を以てした。特に彼の
最も力を入れた師範教育は全くこの主義の発露に外ならぬ。全年四月の小学校
令の改正は、我国教育史上極めて意義深き事件である。即ち小学校を尋常高等
の二科に区分し、児童は六才より十四才まで八ヶ年間の学齡として、父兄後見
人は其の学齡児童をして尋常小学校を卒業せしむべき義務を負ふこととなつ
た。然し経費は主に生徒の授業料を以て之に充てた故、未だ完全な義務制とは
いはれなかつた。当時日立に於ては縣令により左の如く指令された。

*尋常 四ヶ年 高等 四ヶ年

一、宮田小学校は助川小学校に合併

校長 佐々武夫

一、滑川小学校は田尻小学校に合併

授業生 大和田秋太郎

斯くて日立は、暫くその教育を他村小学校に委ねることになつたが、
二十二年四月、町村制の実施により、宮田・滑川の二ヶ村は合併して日立村と
称するや、旧滑川小学校を以て日立尋常小学校と称し、日立村の全学齡児童を
収容することゝなつた。当時の教導には、船橋春吉・石井磊三等が当ることと

なつた。

思ふに、此の頃は我国政治史上・思想史上、特に教育史上記念すべき事件の
あつた時であつた。即ち二十二年二月帝国憲法の發布あり、国民の自覺に基く
自由民権の思潮は認められ、日本国民は階級的偏見を排して、同権の愉悅の中
に聖代を讃仰し、国力頓に隆々として目醒しい展開を遂げ、来るべき對外試練
の準備は着々として進行しつゝあつた。特に、この二十二年二月は本邦教育界
の大恩人、森有礼の暗殺された時でもある。之、本邦教育界が如何に多難の時
であつたかが察せられる。更に二十三年十月の教育に関する勅語の煥発は、欧
米文明の眩惑に酔へる国民思想界への一大警告であり、日本精神の明確な宣言
であり、我国教育精神の指導標となつて、国民教育の具体的定立を見たのであ
る。

我が町の教育も日立村の誕生を契機に發展期に入り、日立教育史上に於ても
一大転機を劃した時である。顧るに、之までの日立の教育界は、農村教育の時
代であつた。然るに、次の明治中期に入るや、町民生活への鉅山の進出に依
り、本町の教育は稍々複雑なる形相を取ることとなるのである。

一方我が民族は、愈々對外的試練たる、日清日露の両役に直面することゝな
り、国民教育は、思想的に一大転廻をなし、戰時的緊張期に入るのである。

(二)

明治中期 (二十五年頃……三十八九年頃)

東海の島国帝国日本も、その覺醒に際し、對外的發展の必然的障礙に直面す
ることゝなつた。日本民族の過去に鍛へ來つた力の發動期、試練期は來た
のである。明治中期は、正に非常時の色彩の濃い時代である。而も世界各国環
視の中に於ける、我國民の大捷は何を物語るか。これ國民の一大精神的團結の
結果に外ならない。而して此の國民的大同團結精神の涵養は、実に國民教育の
一大使命である。即ち國民教育の統一的發展向上は、國家勢力の發揚上欠くべ

からざる一要件である。更に遼東還付の悲憤の経験は、国を挙げて復讐の血を湧かし、終に三十七八年の戦役に於て大溜飲を下げたのである。この明治中期に於ける教育は正に戦時的緊張に依つて終始したのである。

日立に於ける小学校教育は此の期に入つて更に進展の路を辿り、二十九年一月の調査に拠れば、日立小学校の児童全数は、一七八人で、中男児一四五人・女児三三人であつた。右の調査に拠ればまだ女子の教育は成^マ工なりとはいはれない。併し、三十三年には日立村学事関係者並に学校職員の努力に依り、就学を奨励した結果、生徒数頓に増加し、二七八名を算へ、更に普通教育の徹底へと進んだのである。

ついで三十四年、我日立に、赤沢鉱業株式会社の創立を見、村も漸く人口の増加を来し、農村より、鉾山村への第一歩を印したのである。此れ真の意味に於ける日立の誕生であらう。而して日立の教育の真の黎明期であるといへよう。他地方よりの移住民は、続々とこの鉾山へと集ひ来り、先住村民の蔓を破り、村の積極的活動はこゝに開始され、小学教育も新しい方向を考慮せざる可からざるに至つた。

当時日露の国交逼迫を告げ、国民の緊張は將に絶ち切れんとするまでに張りつめ、斯くして国交断絶・宣戦布告となるや、我が日立よりも愛国の出征軍人続々と送られ、村の教育界も亦、戦時的緊張を見せるに至つた。

幸にして皇軍は奉天・日本海の二大陸海戦に決定的大捷を獲て、我國民力の永年の蓄積は美事に報いられ、今や日本は東洋の日本に非ずして、世界の日本として堂々たる第一歩を踏みしめる事となつた。此に於て大國民としての教養の向上は叫ばれ、国民教育の重大性は唱へられ、日立の教育も、村の発展と共に次の発展期に入るのである。

(三)

明治末期 (三十八九年頃………末年)

日本の国家活動は前二役の結果更に大規模のものとなり、今や国民は大國民

としての教養の向上に専念すべき時となつた。故に四十年三月義務教育年限の延長を見、日立に於ても、これに依り義務教育年限を六ヶ年に延長することとなつた。更に従来の赤沢分教場を日立鉾山尋常小学校と改称して独立せしめ、間もなく高等科を併置した。これは村人口の漸増に対する方策であつた。

当時國民は日清日露の二大戦の勝敗に酔ひ、浮華に流れ、安逸を貪る風があつた為、天皇には賢くも御懸念あらせられ四十一年十月戊申詔書の煥発を見、國民齊しく質実矯風への決意を固めるに至つた。

日立にては、上記の二小学校のみにては、発展途上にある村の全児童を収容する事、到底、不可能なるを以て、四十二年二月、字杉本に日立鉾山第二小学校を設置し、翌年高等科を併置した。此の時既に鉾山は久原房之助の経営する所となり、活気ある事業振を示しつつあつた。鉾山の発展は日立の小学校特に鉾山直轄の二小学校の教育施設の完備を促進した。因みに鉾山第一小学校の此の期の発展は次の如くである。

〈表3 日立鉾山第一小学校児童数推移 30頁〉

此の頃、鉾山の附属機械工場分離独立し、新に一企業体となつて村に出現し、斯くて日立は鉾山工場の二企業体を背景に、大正の世に入るに及んで未曾有の躍進を続け、教育事業に於ても異常な展開を見せることゝなつた。

第四節 大正の教育

日立に於ける大正の教育は、鉾山・工場の資本主義的活動を背景に、相当波瀾を見た時である。今や一山溪の畔に発せし寒村日立も、農村的地味な姿相より、華やかな鉾工業の町、生産王国への躍進の歩を進めることになつたのである。大正は日立の青年期である。此の期を本町教育の発展の状況から考察して、左の二期に分けて見よう。

一、大正前期 (大正初年………十、十一年頃)

日立町勢の急角度の上昇とそれに次く転落を背景とする時代

二、大正後期（十、十一年頃……末年）

日立町勢の着実なる隆昌を遂げた時代

右の二期を明瞭に分割するものは、大戦の好景気後、町を襲った戦慄すべき経済パニックである。この惨事は未だ町民の脳裡に生々しく一痕を残してゐるもので、本町教育界の発展も一時阻止せられた観があつた。然し幸にして後期に至り町勢は着実な上昇のコースを辿り、その歩速を緩めず現代に至るのである。

（一）

大正前期（大正初年……十、十一年頃）

サライエヴォの一少年学徒の一弾は、発火点にたしてゐた欧州の緊張の網を断ち、未曾有の民族的、国家的闘争へと、欧州の天地を叩き込み、遂に欧州戦は世界戦的發展をなし、日米両国の之に参するや、全地球面は暗澹たる戦雲に包まれるに至つた。幸にして帝国の位置が戦禍の中心を遠く離れてゐた為、却つて萌芽期にあつた我が鉱工業界に、一大刺激を与へ、その不自然なるまでの大發展をなさしめたのである。鉱山・工場を其の主要なる生活経済資源として抱きたる日立も、この好景気の余波を受けて、すさまじい發展を見せ、人口は激増し、教育施設は随つて大改善大拡張をなされたのである。

この發展は第一に小学校の増設に依つて明らかに物語られる。即ち四年十二月駒場^{マヤバ}に一小学校を新設し、後に前記の三校を其の開校の順に夫々日立第一、第二、第三、小学校と改称し、新設校を日立第四小学校と命名した。然るに鉱山工場の發展は実に目覚ましいものがあり、左記四校のみにては全村学童の収容殆ど困難となり、七年六月、仲町に日立第五小学校を新築開校するの已むなさに至つた。この期に於て特筆すべきは、村民全般の児童教育に対する覺醒で

ある。即ち『邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカシメン』とする維新の大理想は、我が日立に於ては、大正七年、実現の可能性を十分に示したのである。

大正前期に於ける就学歩合を求めれば本町教育の進展振りが察せられる。（学齡児童数を一〇〇・〇〇とす）

〈表4 大正前期日立町小学校就学率推移 31頁〉

更に此の期に於ける小学児童の激増は日立第二小学校の例を以てしても明らかに示される。（六〇頁の表参照）

〈表5 大正初期日立第二小学校の児童数推移 31頁〉

右の表に拠るに、女子の高等小学教育の振はないのは、父兄が労働者である為、女子教育の重要性を未だ認めなかつたのに依るのであらう。比較的に男子の教育の振るつてゐるのは、学歴に依る鉱山・工場への入社待遇の差別に因るのであらう。

兎に角、日立の普通教育は全く異常な發展期に入つたのである。これは村の経済的發展と歩調を一にするものである。村民は温い懷を撫でながら、人の込み合ふ街道に、毎夜立並ぶ大道店を冷かしに出で、村は全く好景気の暖風に酔ひ、奢侈に流れ、浮華の風潮は村の各生活層に浸潤するに至つた。これは当時全国的に見られる所であつた。此の時、この憂ふべき全国的浮華驕奢を、戒めんが為か、前記の好景気の一大反動は、戦慄すべき経済パニックの形を取つて本邦鉱工業界を襲ひ、この山間の黄金王国日立にも、この餘波は悲惨な運命を齎した。即ち日立鉱山・工場に於ける營業不振極度に達し、従業員大減削の斧鉞を振ふの已むなきに至り、村人口は漸減し、前記の日立第五小学校は、開校以来僅かに三年にして、遂に十年三月第四小学校に合併せられて廃校の已むなき状態となつた。『不景氣く』の悲鳴は村内到る処にて洩られ、就学歩合に於ても著しい下降を示した。各小学校に於ける児童数、学級数の激減は、日立第二小学校の例に徴することができる。（六五頁の表参照）

〈表6 大正中期日立第二小学校児童数推移 31頁〉

高等小学児童数はこのパニックにも拘らず男女共に依然着実な進展を続けてゐるのは注目に値する。

要するに本町の教育は此の経済パニックを契機として一転進をなすのである。

(二)

大正後期 (十、十一年頃……末年)

私は彼の経済パニックが村の空気を陰惨ならしめてゐた際、日立第三小学校に入学し、大正末年第一小学校に転校して、尋常小学の課程を了つたのである。いわば此の期の日立に於ける小学校教育は、私の小学校時代を追想せしめるものがある。桜咲く春四月、手を引かれて校門をくゞつた時は、村は正に苦境のどん底に呻吟しつゝあつた時で、桜は無心に誇つてはゐたが、本町教育史上の一大沈滞期であつたのだ。此の頃は未だ古い嚴肅主義の教育も幾分其の跡を残し、強い鞭さへ児童の軟き肌にとぶことがあつた。

然しパニックに反省した鉦山・工場の企業者達は、着実な進展を企図して奮起し、村政も漸く回復の歩を辿つたのである。教育界に於ても以前の生気を盛り返して来た。例に依つて日立第二小学校の実情を見よう。(六八頁の表参照)

〈表7 大正大正後期日立町第二小学校児童数推移 31頁〉

復興の意気に燃え立つた村民一般の奮闘は報いられ、村勢は頓に開展し、終に十三年町制は施行せられ、面目は鮮やかに一新された。

此の期に於て特記すべきは、大正十二年関東大震災に際して、煥発せられた、国民精神作興に関する詔書の教育的影響である。本町内の各小学校は、各々質実勤勉の校訓の下に、緊張した活動を始めたのである。この気風は、日立の教育の基調となつて現在に至るのである。特に本町の社会教育は、この聖

旨に基づき、鉦山・工場の二大企業體と各小学校を中心として、特色ある輝きを放つことゝなつた。これは次章に於て詳述したい。

兎に角以上は現代日立の教育を導き出した史的背景の概観である。私は、次の章に於て、日立の現に行はれつゝある教育□実、並に活動の全貌に触れ、将来の動向を探りたいと思ふ。

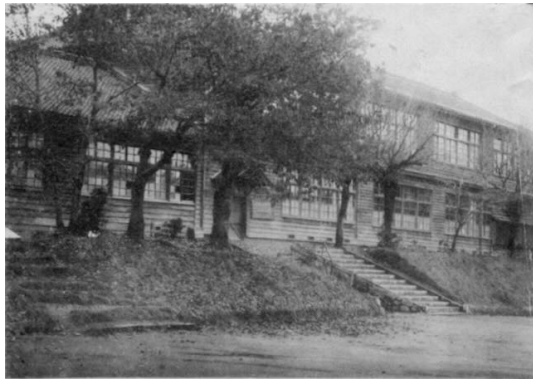
〈改丁〉

第二章 現代日立の教育

此の章で扱ひたいと思ふのは、昭和に入つて以来の日立の教育事実である。此の期は最も正確な資料の最も多く得られる時であり、且、複雑なる教育事象の目撃し得る時である。然るに現代を正しく客観的に批判する為には、現代を去つて考察せねばならぬ。それは勿論不可能である。以下説述する処は私の目に映じたまゝの、現代日立の教育活動の諸相である。

第一節 概観

日立は特殊性を多分に有つ町である。特殊性を多分に有つ日立に、特色ある教育の行はれるは蓋し必然である。今日その教育活動を概観するに、現代に於ては特に即郷土的、即生活的教育が著しく重視せられてゐる如くである。これ、単に日立の地域性の然らしめるのみでなく、最近の代表的教育思潮たる郷土教育論、生活教育論等の影響に依ることは明らかである。この教育活動の中心となるは、勿論学校であるが、此の町の生活と特殊的な関係に在る鉦山・工場も、亦重要な役割を演じてゐるのである。特に社会教育の部面に於て然りである。而して、その活動は、飽くまで資本主義的傾向に於て著しい特色を見せてゐる。要言すれば、実生活の準備としての教育が、資本主義を利用し、或は之に利用されつゝ、行はれてゐるのが現代日立の教育活動の実相であらう。



日立第一小学校

る。第一校は日立在来の農家の子弟を收容し、他四校は他府県殊に東北地方よりの移住民の子弟を收容してをる故、前者は茨城県の気風の中に先住人としての誇りに愉悅を感じてゐるが、後者は植民地的気風に、生き／＼とした希望に充てる校風の新鮮味を楽しんでゐる。而して前者は該博舎と称せし時代以来の保守的な雰囲気未だ抜けきらぬに反し、後者は思い切つて積極的な自由な教育方針の下に、四校相聯携して精進を続けてゐる。且四校は、鉾山・工場の絶大なる支援の下に、種々の新経営をしてゐる故に、現代日立の教育の特色は、寧ろこの四校の活躍の中に認められるといつてもよからう。今各区の教育情景を一瞥したいと思ふ。

A 農業区（第一校附近）

此の区の人々は純朴ではあるが、一面排他性の強いことも看過できない。『土地の者』としての誇りの中に、『旅の者』即ち移住民を蔑視しがちである。また第一校に於ける最近の頻繁なる校長異動は、少なからず区民の不快を買ひ、学校に対する親しみも、自ら薄らぎつゝあるのではないかと懸念せられる。

而して他の新四校の活気に充ちた進展振りを、羨望の念を以て眺め、母校を卑下してゐることは事実である。然しこの学校は、町随一の好自然環境に恵まれ、少数の学童ではあるが、静かな超世間的学園生活を送り得る特典を有してゐる。爛漫と咲き誇る四月の牡丹桜は、校庭を美しく彩り、学童の可憐な胸裡に得がたい感銘を与へて、卒業後も尚、春毎に懐旧の感を湧かしめるのである。本町の小学校の本校であるだけに、落着いた着実な学校であり、今や隔離された生活

より、他の新学校との聯携に乗出しつつある。最近、工場の大拡張に連れて、卒業生の工場に入社することを志望する者、漸次多数に昇り、女子に於ては、この傾向は特に著しい。故に父兄の中には、第一校の学校経営の逐次積極的ならんことを希ふものも相当多くなつたやうである。

B 鉾夫区（第二校附近）

この区域も町の西北隅の谷間に在る關係上、農業区に次いで隔離性を有つた区域である。然し日立第三校と共に、鉾山の従業員の子弟を教育してゐる為に、第二校は、第一校に比して他校との交渉も比較的頻繁である。唯他の三校に比して、幾分保守的であることは否めない。区民は地下幾尺の暗黒に鶴嘴を振る鉾夫ではあるが、割合にインテリであり、小学校の教育に対しては理解ある態度を見せてゐる。尚前述の如く、実直勤勉な東北農民の出である故、至つて温和順良で、無産者に許された希望である子弟の教育には、全く献身的な努力を惜しまないのである。一日、私は第二小学校の全学級の授業実況を瞥見して、その陰鬱な校舎と、騒々しい環境にも拘らず、児童は皆教師の熱心な指導

下に、柔順に、明朗に、規律正しく学習してゐるのに、愉快的感激を覚えたのであつた。

C 製鍊区（第三校附近）

日立第三小学校は、最も統制ある、而して最も積極的進歩的な活動をしてゐる学校で、日立小学校教育の中核的指導的存在ではないかと考へられる。元校長根本武夫氏の指導下に成つた『教育改善方案』の如きは、其の教育事業に於ける真摯な具案的活躍の一面



日立第二小学校



日立第三小学校

を物語るものである。此の教育的苦心は、燃ゆるが如き教育愛、即ち「児童を思ふ真心から出たものでなければならぬ。」私は師範在学当時、教生郡部参観の序に、この学校の授業を参観し、其の新鮮味に富んだ、思い切つた明るい活動振りに感謝したものである。私の考へでは、日立の教育を知るには、日立第三を観るに尽きると思はれる。本町小学校教育の特種活動即ち職業指導教育に於ても、映画教育に於ても、常に他校に対して指導的真剣味

を示してゐる。

*『教育改善法案説明書緒言』の一節

児童の父兄は、鉾山製錬夫を主とする為、此れに適應せる特色ある教育が行はれてゐる。父兄は、鉾山区に於けると同様に、実直勤勉なる東北系の人々である。学校に対する理解も関心も、他区と比較して、最も勝つてゐるのではないかと考へられる。学校の行事には、常に全幅の支援を惜しまぬ熱心さである。彼等是一般にインテリ生活を営んでゐる故に、児童の教養に対しては特に関心を持ち、力瘤を入れてゐる。

D 工業区（第四校附近）

区民は日立工場従業員を主として、本町各区域中、最もインテリの多い地区である。個人的に眺めれば区民の教養は玉石混淆である。上は博士あり、学士あり、高専卒あり、下は小学校普通教育さへ十分に受けぬ者もないではない。然しこの玉石混淆が、事実上素玉を琢く結果になつてゐるのである。調査に依れば、工場従業員一萬中、大学卒業者百名、専門学校卒業者二百五十名の堂々



日立第四小学校

たる陣容である。これに依つても首肯せらる如くに、此等の教養ある人々を日常目撃する労働者は、必然我が子弟の前途に希望と光明を夢みつゝ、学校教育に絶大なる関心を持つ筈である。更に工場にては、学歴に拠つて入社待遇を差別してゐる故に、子弟の教育に対する父兄の関心は現実的、生活的真剣味を帯びて来てゐる。第四校は工場の支援の下に明朗な活動をしてゐる学校で、特に児童自活をモットーにしてゐるのは興味ある事である。

*日立町勢一覧に拠る

E 商業区（第五校附近）

第五校は位置が商業街に在るため、聊か他校と異つた景觀を呈してゐる。父兄は、製錬夫・商人が大部分である。設立後間もない学校である故、父兄の学校に対する関心は、他に比してさ程著しくない。最新にして最大の学校である為、凡ゆる種類の家庭の子弟を教育し、今後の活動が期待される。学校の環境は騒がしい街□である故、良好とはいへない。且付近が煙の絶えぬ火葬場である為、識者の間に移転問題が論議されてゐる。

以上、觀じ来れば各区の小学校に於ける實際教育も、夫々その所在地域性に依り、その生活を営んでゐる故に、町民の子弟も大體之等に働く労働者となるのである。彼等は全くの無産者である。彼らの唯一の資本は、その五尺の肉体である。健康な肉体こそ最も誇らしき貴重なる財源なのだ。小学校に於ける体育の盛なもの、蓋し必然の結果である。彼等は労働者として即ち職人として生業を立てる身である。土地もなく金もない彼等には、生業技術の習得こそ亦貴い財源となるのだ。之、学校に於ける職業教育の特に著しい活動を見せてゐる



所以である。次に、日立はその大部分労働者街である。彼等労働者の求むる娯楽、趣味は、必ずしも高尚なものばかりではあり得ない。而も、附近には相当多くの□劇場・映画館あり、無自覚な小児の精神生活の上に及ぼす悪感化は、頗る憂慮すべきものがある。これ、児童映画教育の唱道された所以である。要言すれば本町小学校に於ける特殊な教育事業は、実に体育、職業教育、並に映画教育の三である。今次に此の各々に就いてその概要を紹介したいと思ふ。

一、体育

『総ての社会に於ける体育の中心は、常に学校に在ることを忘れてはならない。学校内のみの体育指導者ではない。少なくとも一町村内の体育に就いて其の相談相手であり、指導者でなければならぬ。』とは、第五小学校酒出訓導の主張である。此の熱意、此の抱負あつてこそ、現代日立の体育が、普通化され、合理化され、社会教育上に於ても、重大役割を演じてゐるのだ。而して本町学校体育の特色は、常に労働者としての耐久性ある強壮な身体と、社会人としての明朗なる気風とを涵養せんと努むる所に在るやうである。本町に於ける学校体育及び大衆体育の隆盛は、独り各小学校の中心的活動に起因するのみでなく、実に鉦山・工場側に於ける、適切合理的なる援助奨励に拠ることを忘れてはならぬ。今その実際に就いて眺めて見よう。

*体育雑感に拠る

各小学校に於ける体育指導の実況

- 1、体操科の指導法
教材配当の研究・相互研究・体操競技会
- 2、課外運動の奨励
各運動部に分ち各種目の研究をする。
- 3、体育座談会
各単位に、又は教師中心に、或は鉦山・工場等の選手を中心に行う。
- 4、体育研究発表会
大體に於て各運動部代表に依つて一月一回位の予定で行ふ。
- 5、優秀児童の特別指導
所謂選手指導である。
- 6、教練の重視
時局の影響に因るもの。
- 7、教室体操・腰掛体操の研究
家庭にても如何なる場所にも運動の出来ることを知らしめる。
- 8、国民保健体操
鉦山・工場側との連絡に依り、家庭にまで及ぼす。
- 9、体力検査の活用
児童の競争心理の利用である。
- 10、スポーツ精神の涵養
対外試合中に於けるスポーツマンシップの陶冶、試合後に於ける反省等に依り効果を上げる。
- 11、武道（柔剣道）の奨励
鉦山・工場の道場と連絡を取つてゐる。
- 12、外気学校

a. 臨海児童寮の管理

b. テント生活の指導奨励

c. 林間生活指導

d. 坑外教授（遠足旅行登山等）

e. 芋掘会

13、身体検査の活用

学校医の責任ある活動に俟つ。

14、体育簿の活用

病氣欠席の病名其の他児童の身体は一切に関する事項を記入し、自己の身体的欠陥を知らしめんと努力する。

15、衛生デー

毎月朔日を以て、衛生デーとし、身の清潔を図り、慣習づける。

16、姿勢の矯正

鉾山・工場の入社試験に於て、特に姿勢の注意されてゐる事実に依る。

17、衛生思想の徹底其の他

之は鉾山・工場・役場等の後援の下に行はれてゐる。

体育競技の各小学校対抗試合は、町民の関心頗る大なるものがある。特に野球の如きは、町民の待望と人気とをグラウンドに集中する大試合が行はれる。

この催しを見る時、吾人は強く体育日立の迫力を感じる気がする。又テント生活の如きは夏季に於て盛に行はれ、その効果は一般に好感を以て見られてゐる。更に近年に於ける国民保険体操、ラヂオ体操の流行は、学校を中心として殊に著しいものがある。

この体育の活気ある成績は、次に述べる職業教育に得がたい光明と活力とを与へてゐるのである。即ち本町小学校の体育の理想たる、労働者として健全なる身心の完成は事実となつて、職業□□に於て美事に反映されてゐるのである。

二、職業教育

職業指導教育は、本町小学校に於て行はれてゐる特殊教育活動中最も目立らしく、最も著しい特色を見せてゐるものであらう。或意味に於て其れは郷土教育であり、生活教育であり、更に社会人教育である。これは前述の各生活区に依り、夫々特色あるは言ふまでもない。即ち児童の卒業後の就職希望に拠つて、職業指導の実際も異つてゐる。次に各小学校の尋・高・卒業生の就職実況を昭和七・八年の両年度に就いて眺めて見よう。

A、尋常科卒業生就職表

a、尋常科卒業生就職表

（上級学校は中学校・高等女学校・実科女子校）

〈表 13 日立町尋常科卒業生進路 33 頁〉

b、高等科卒業生就職表

（上級学校は前述の外、師範学校・工業青年学校・高等三年を含む）

〈表 14 日立町高等科卒業生進路 33 頁〉

要するに各校に依り、其の父兄の職業に依り、特色ある就職成績を示してゐる。第一校は、高等科に於て、その児童の将来の為に、特に農業の理論と実習とを授けて、卒業の生活の基礎を与へんとしてゐる。他の四校は、或は商業科を設置し、或は手工製図又は理科に重点を置く等、出来るだけ児童の将来を考慮に入れた指導をしてゐる。特に注意すべきは、鉾山・工場・商店其の他を利用したる個別的職業指導である。此の最も組織的具案的に行はれてゐるのは、第三、第四、第五の各小学校であらう。第一小学校にては、尚早としても、第二小学校にては早晩行はるべきであらう。兎に角、此の種の職業指導は相当真剣な教育愛の発露として、漸次理想的に行はれつつある。各校には、夫々此の主任の訓導あり、就職の斡旋にも献身的努力をしてゐる。此の職業指導教育は、先づ児童の身体検査・個性検査並に家庭の状況等に出発して、種々の考慮

の下に職業の選択をなさしめ、此等各種の職業の体験実習をなさしめ、児童をしてその志望の職業道に熟達し兼ねて雇主をして其の雇傭せんと欲する子弟の性能を検するの機会を得せしめるのである。此の職業実習指導実施以来の卒業児童の就職成績は、俄然好況を呈し、且社会人的精神陶冶、及び各種職業に対する理解向上に裨益する処甚だ多かつたやうである。今、日立第三校の職業実習指導の実際を例にとれば次の如くである。

四月

- 一、身体検査
- 二、第一回希望職業調査
- 三、就職並に進学状況調査
- 四、未就職児童の指導
- 五、第一回就職先訪問
- 六、進学児童召集指導

五月

- 一、職業指導を主としたる学級経営の打合せ
- 二、第一回家庭訪問開始
- 三、学籍簿操行査定簿記入
- 四、前年度卒業児童召集指導
- 五、未就職児童の就職斡旋
- 六、町外就職児童第一回通信指導

六月

- 一、職業訓話（学校長）
- 二、学業成績調査開始
- 三、職業実習に関する課外指導

七月

- 一、夏季体験実習生募集

P. 104

- 二、実習生父兄懇談会
- 三、実習先交渉開始
- 四、実習体験生一覽表作成
- 五、休暇中に於ける職業研究

八月

- 一、夏季体験実習先訪問
- 二、慰安キャンプ
- 三、前年度卒業生第二回召集指導
- 四、職業研究

九月

- 一、夏季実習先へ感謝状発送
- 二、実習体験発表
- 三、夏季実習生職業別一覽表作成
- 四、『汗の体験』の実習記録印刷配付
- 五、町外就職児童第二回通信指導

十月

- 一、職業指導研究協議会（学校内及び各学校合同）
- 二、求人先開拓の意味にて職業紹介所と聯絡
- 三、職業課外指導

十一月

- 一、職業課外指導
- 二、職業講話
- 三、珠算競技会
- 四、自転車練習

十二月

- 一、希望職業の第二回調査

- 二、選職冬季父兄会
 - 三、就職幹旋児童名簿作成
 - 四、求人先交渉開始
 - 五、求人先調査
 - 六、各季職業体験実習生募集
 - 七、実習先訪問
 - 八、冬季体験実習一覧表作成
- 一月
- 一、冬季実習先へ年賀状発送
 - 二、就職希望状況統計一覧表作成
 - 三、就職幹旋開始
 - 四、学校選択指導
 - 五、履歴書作成の指導
- 二月
- 一、求人先調査進行
 - 二、父兄会開催
 - 三、健康相談
 - 四、珠算競技会
- 三月
- 一、未就職児童の調査
 - 二、進学児童指導
 - 三、卒業児童関係書類帳簿整理
 - 四、反省会
 - 五、来年度職業指導案作成

以上は第三小学校の例であるが、本町各小学校の職業指導の概念を得るに足ると思ふ。酷暑の候、厳寒の節、他地方の小学児童は、平和な父母の膝下に休

暇の愉楽を味ひつゝある時、職業戦線に雄々しく乗出して、或は弱い腕にハンマーを振ひ、或は汗を拭きつゝ車を曳き、或は自転車に身を飛ばして、自己の将来の開拓に余念なき、可憐な実習児童を思ひやつては、転た涙ぐまじきものがある。而して之が指導に、全生活を献げて奮闘してゐる訓導諸氏の活躍は、国民教育の柱石たる頼もしさを感じしめると同時に、敬意感謝の念を禁じ得ないものである。学校のみ教育は、完全な教育ではない。児童の将来を考へてやつて、其の卒業後も責任感を以て看護するのも、教育者の愉快な使命ではあるまいか。次に前述の職業体験実習の実況を表示する。(第五小学校の例)

昭和八年二月五日より同月十日迄六日間、

高二在籍児童数男七四名、女五八名、計一三二名

〈表15 日立町第五小学校高等科二年生職業体験実習状況 34頁〉

在籍一三二名中、一〇七名の実習生あるに注意すべきである。こゝにも労働都市日立の姿が物語られてゐる。彼等はこの実習後僅か一ヶ月後、即ち卒業後、如何なる就職状況を示したか。左の表を右表と照合すれば興味深きものがあらう。

〈表16 日立町第五小学校高等科卒業生就職状況 34頁〉

右の就職率は、男九一%、女九五%、平均九三%で、女子の就職率の、男子のそれに比して大なるに特に注意すべきである。こゝにも労働無産街としての日立町民の生活が反映されてゐる。

現在までに至る、この職業実習の成績は美事なもので、遅刻なく、早退なく、欠勤勿論なく、彼等児童の精神力、体力の健全さには舌を捲くものがある。この健全なる精神力、体力こそ、日常の学校教育の成果であるといはれてゐる。一日、第三小学校に此の指導主任を訪ひ、彼等可憐なる実習生の体験記録たる『実習日記』を通覧して、汗の体験の涙ぐまじきまでに真面目な記述に、深く感動した者である。更に此の職業指導の為に、教材の配当に苦慮し、不断の精進と犠牲とを惜しまざる、訓導諸氏の目醒ましき健闘に打たれた者である。然し日立の職業教育は、未だ理想化の途上にあると謂はねばならぬ。爾

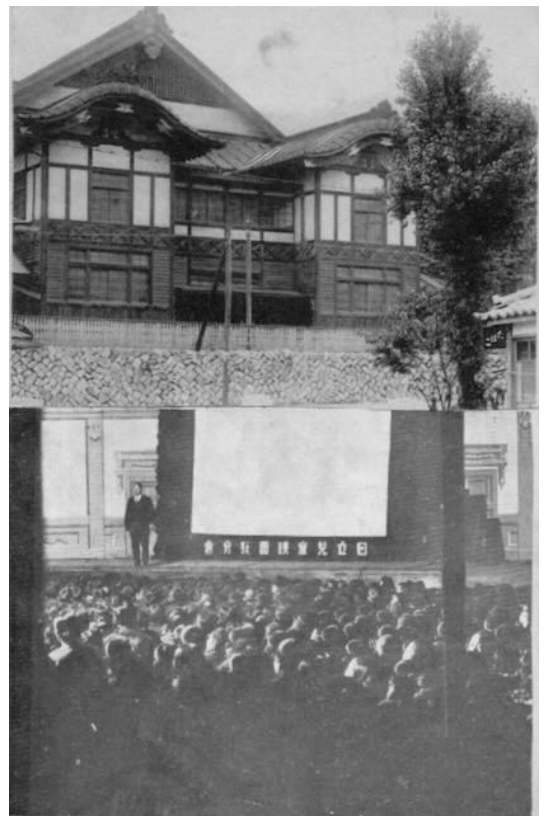
後の活動に期待すべき所が多いであらう。

三、映画教育

変化とスピードへの現代人の憧れは、映画に依つて充たされるものと見えて、一時は映画の黄金時代を現出したことさへあつた。此の日立助川の鉱工業地帯も、他に娯楽慰安を求めるに由なき労働者相手のシネマ興業が盛に行はれ、大正十三年頃には、町は全く此の風潮に靡くに至つた。爾来今日に至るまで、この映画熱は依然衰へず、特に児童の精神生活上に及ぼした感化影響は、甚しいものがあつた。考ふるに、彼等児童の精神生活は、飛躍と流動のそれである。彼等は一の映画を鑑賞するにも、決してそのテーマなり、其の提供する各種価値に対して感激せず、彼等の脳裡に深く刻みつけられるものは、実に刹那のシーンの感覺的刺激像である。而して彼等の教化上、面白からぬ映画は、特に此の断片的刺激性を多分に有してゐるのだ。これ、過去に於て本町の小学児童の悪映画に陶醉して、屢々忌まはしい風教上の問題を惹起するに至つた所以である。現在に於ける日立及び附近の映画館の活動状況を参考に左に上げよう。

映画常設館	二
半映画館	四
臨時映画会場	五

右の如き状態である為、久しく以前より、教育者、識者間には、児童への悪感化を憂惧するものあり、之が積極的防止運動も次第に表面化し、且つ實際化して来た。遂に大正十五年八月、本町教育界の先輩鉦山事務所の野村留男氏は、先づ本町巡查部長、各小学校長等と、協議を重ね、映画会場への児童の入場を絶対に禁止することに一決し、児童の父兄全部に此の趣旨の印刷物を配付して後援を求め、映画教育の烽火は猛然と上げられたのである。下つて昭和二



映画会々場 (上) 概観 (下) 内部

年、新聞社・温交会^{*}の主催する教育的映画のみ、父兄同伴に限り、観覧を許可することとした。然し此れも糊塗策に過ぎなかつた為、徹底せず、昭和三年四月、遂に敢然として此れが徹底的統制的立策を強調して、こゝに日立児童映画教育界は創立せられ、現在合理的統制下に其の使命遂行に邁進しつつある。此れは、中心となるべき教育者のみでなく、子弟の教育に十分の理解を有つた父兄の真摯なる態度に依るもので、本町民の對教育的関心を反映するものである。日立児童映画教育界は事務所を第三小学校内に置き、教育家を中心として其の他の有識者の賛同協力の下に奮闘を続けてゐる。即ち月一回町内二ヶ所に於て児童の爲の講堂映画会を開き、町内各小学校に於ては、随時教室映画を行ひ、且社会教育にまで進出して、屢々適所に映画会を催す等、其の活動は一年と具体化し、解説も映写も小学校の職員自ら行ふといふ熱心さを以て、児童教化に献身的努力を捧げてゐるのである。此の映画教育運動の今日までに至る成果は驚歎すべきものがある。『映画会』の名は、児童間に清浄な、明朗な意味を以て喜ばれ、父兄も、微笑みつつこれに月二銭の会費を持たせてやるのである。この教育映画で特に視るべきものは、学習科学映画である。生物の生態

実写の如きは、或意味に於て真の直感実物教育であるといへよう。学年に依り、夫々その教材の配当を考慮し、各々映画の性質を変へ、映画会開催前に試写を行ひ、豫め周到な立案の下に萬全を期してゐる。此の真剣な活動は、屢々官辺の積極的指導援助を懇望するに至り、『現在我が国に於て、学校教育に対して映画利用設備として、監督官廳から公然と之を認めて、相当な経費を支出してゐる処がいくらあるか。又行政機関指導機關の設立してゐる処が幾許あるか。』と当局を叱咤する程の意気込みである。

* 鉦山工場の従業員親睦団体

* * 日立児童映画教育会編「映画教育に就いて」中の第三小学校訓導佐藤氏の解説の一部

以上述べ來つた体育、職業教育、映画教育の外に、日立の小学校教育には、其の真剣味に於て、其の熱意に於て感ずべきものが相当ある。特に敬神運動・愛国運動の如きは特筆すべきものであらう。小学校教育は即ち社会教育を包含すべきであるとは本町小学校職員の綜合せる主張の如くである。この主張の抱負は、後述する社会教育の實際活動に於て、如実に露はれてゐる。

(二)

実業補修、中等教育 其の他

実業・補習教育に就いて謂へば、従来の公民学校の後身たる日立実業男女青年学校を町内三ヶ所に設け、八五〇名の生徒を収容して、独特の教育を行つてゐる。然しこの種の教育が最も特色ある活動をしてゐるものは、鉦山・工場の経営する学校に於けるそれである。即ち日立鉦山甲種夜学校、同じく乙種夜学校、及び日立工場工業青年学校（又は専習^{マニヤ}学校）等である。鉦山甲種夜学校は、鉦山工場の従業員にして高等小学校卒業の者、並に之と同等の学力を有する者を収容し、本町内二ヶ所に設置され、修業年限は三ヶ年、教科目は国語・

英語・漢文・算術・代數幾何・三角・物理・化学の基礎的なものである。其の優等生に対しては、鉦山側にて、特殊な待遇を与へてゐる。時には給費に依り、上級学校への入学を保証する事もある。乙種夜学校は同じく鉦山工場の従業員にして、尋常小学校卒業の者、並に高等小学校中途退学者、及び之と同等の学力を有する者を収容し、同じく本町内二ヶ所に設置せられてゐたが、現在では鉦山区に一校を存するのみである。修業年限は二ヶ年、教科目は修身・国語・算術で、特に補習の目的を以て行はれてゐる。前記二校の教育は、大学・高専・師範卒業の者が當つてゐる。工場経営の工業青年学校は、明治四十三年四月の創立で、工場内の所謂徒弟養成所で、優良健全なる職工の養成を目的とし、之に必要な知識技能を授けんとする学校である。卒業者に就職の保証を与へてゐる關係上、入学志望者は募集人員の十数倍に達する程である。これも労働都市日立の一風景である。修業年限は三ヶ年、教科目は修身・国語・数学・英語・製図・電気工学一般・事務法其の他である。教員は前二校のそれと同様の学歴を有する工場関係者である。月謝は取らず、服装費・小遣等も支給し、無産労働者の子弟の爲には絶適の学校である。



縣立日立中学校

町民の子弟の爲の中等教育は、県立日立中学校及び日立助川組合立東海高等女学校等があり、活氣を以て行はれてゐる。日立中学の、緑に映ゆる新しい灰白色の洋館は、教育王国日立の誇りの一つである。東海高女の縣立昇格は今や目睫に迫り、將來の女子教育の發展に貢獻する所大なるものがあらう。其の他、町民の中には、水戸に子弟を送つて中等教育を受けさせるものが少くない。特に水戸の工業学校に学ぶ町民の子弟

が多い。

其の他、幼稚園教育の為には、三ヶ所に私立幼稚園あり、朗らかな活動をしてゐるが、鉾工業都市として托児所の観がないでもない。

第三節 社会教育

日立は労働都市である。東北系の温和順良なる人々の町ではあるが、労働者街たる以上、必ずしも教養ある人々のみはゐない。且、彼等労働者は、汗の労働の閑暇に心身の慰藉の為、娯楽及び嗜好物を求める。随つて悪風の憂ふべきものも絶無とは言えない。此れ消極的にはこの社会悪防止の為、積極的には社会思想・道徳の向上の為に、鉾山工場の両企業体が、小学校の力を藉りつゝ町当局の協力の下に、決然として社会教育の一大運動を興した所以である。特に近年に於ける工場の大拡張は、新移住民の流入を招き、動々もすれば日立従来の醇風美俗の損はれんとする懸念あるに際しては、特に該運動に対する要求は大なるものがある。この社会教育の中心主体は、常に鉾山・工場・小学校であることは謂ふまでもないが、此れは或意味に於て鉾山・工場の資本主義的工場管理策の発動でもあり、従業員制圧の一方策でもある。過去数十年の日立の労働都市としての歴史に於て、この無産労働者街にして不穩をる反資本主義運動の起らなかつた事実を見よ。

教養程度は、工場従業員と鉾山従業員とを比較するに、非常な開きがある。一体鉾山従業員の教養状態は如何なるものであらうか。今、鉾山に於ける少々古い調査ではあるが、左に参考に示してみよう。

鉾山従業員就職当時教育程度表

	(尋常一年より出発して数へたもの)
四ヶ年	二九・五%
八ヶ年*	二一・九%
六ヶ年	一二・八%

三ヶ年	八・六%
無教育	七・六%
二ヶ年	五・九%
五ヶ年	五・一%
七ヶ年	三・七%
一ヶ年	一・九%
九ヶ年	一・一%
十……十六ヶ年	一・九%
(平均四・九ヶ年)	

*旧学制を参照

右表を一覧するに、無教育者の多きこと、且平均四・九ヶ年の教育程度とは余りに愉快な事実ではない。然し、右は鉾山就職当時の学力で、就職後鉾山経営の夜学校其の他で教育を受けた者も相当多い。兎に角、右の事実は、社会的教育實際に於て、深慮すべきものであらう。

工場従業員は、青年職工を大部分とし、且会社の採用試験の關係上、義務教育を了へぬ者はない。しかし、中等教育以上の教育を受けてゐる職工は稀である。而も日立工場の社是として、中学卒業者を職工として採用するを、資本主義的工場管理上幾重にも警戒してゐる關係上、好学の士も生活の為には進学を阻まれてゐる観がないでもない。これは社会改善上の大なる矛盾でもある。

娯樂趣味嗜好の点に於ても、鉾山従業員と工場従業員との間には、非常な懸隔がある。特に読物に於て然りである。然し、工場内にある図書室は、蔵書二萬余冊を具へてはゐるが、所員の閲覧の為にのみ存在し、最も必要なるべき、職工の閲覧に開放してゐないのは不思議である。彼等恵まれざる職工達の為には、彼等の親睦団体たる温交会に、図書設備らしきものもある、完備せるものではない。

其の他、従業員の生活にて忘れてはならぬものは、温交会にて町内各所に設置せる、従業員慰安及び親睦のためのクラブである。これは日立の社会教育を

考察する際には、特に考慮すべきものである。この設備は想像以上の社会教育的效果を齎してゐるものではなからうか。

然し、何れにしても彼等無産労働者に、生活の要求する以上の教養を要求するのは無理である。而し、この水準下の教育を受けた者の多い此の労働都市に、奇異に感ぜられるものは、子弟教育に対する父兄の理解ある態度と熱心な研究心である。更に町民の向上心に燃ゆる求知的風潮である。又自己の生活をより清く、明るき道徳生活たらしめんとする不断の修養心である。二つに日立町教育会・日立町児童映画教育会等の教育援助機関の活動の目醒ましきものがあり、日立町青年団、同じく女子青年団の捨我奉仕の活躍あり、並に禁酒会・修養団日立支部・明治会日立支部・救世軍日立小隊等の道徳的・宗教的修養団体の真剣な奮闘を見るのである。殊に青年団の奉仕的行動は、遂に本縣知事を動かした程である。

日立の体育は、日立町民生活の華である。特に国民保険体操の徹底は驚嘆に値する。参考に実例を提供しよう。

- 1、期間 自昭和九年四月二十一日 至全年十月三十一日
- 2、会場数 一八
- 3、指導員数 一九四
- 4、開催日数 一六〇
- 5、開催回数 二六〇（大会三回）
- 6、参加人員
大人 七三一八二人 三二・一％
小人 一五四七五六人 六七・九％
計 二二七九三八人 一〇〇・〇％

ラヂオ体操は、町内十五ヶ所の空地に大衆を集めて、毎朝毎夕行はれ、其の他の工場学校等では毎朝行はれてゐる。又野球・水泳・陸上競技・武道の盛な

のは驚くべき程である。鉾山の作業員間にては、特に相撲弓術が盛である。この町民のスポーツ愛好は町の空気を朗らかにしてゐる一要因であらう。

要するに、日立の社会教育運動は、益々明朗性と普遍性を増して行くことであらう。これ伸び行く日立の為に欣喜すべきことである。

（改訂）

第三章 現代日立の教育に対する私見

教育活動は飽くまで責任に裏着けられた作用でなければならない。学校教育に身を処する者にしても、学校における教育のみを以て教育の能事了れりと断ずるならば、教育の真義を解せざるも甚だしきものである。其の曾ての可憐なる教子たりし者が、社会の荒波に打揉まれつゝ、生活の苦闘を続けてゐる悲壮なる姿を、絶えざる教育的関心と、不安と、同情とを以て看護り得ぬ無責任は、教育者の魂たる教育愛の到底許すべきものではない。学校教育は学校を中心とし、児童生徒を対象として最も容易に行はれ、又之が最も無難ではあるが、更に雄々しく社会教育の域にまで教育愛の優しき腕を伸すのも、亦教育の神聖なる且愉快なる義務であり、使命ではあるまいか。此に於て私は現代日立の小学校職員諸氏の積極的奮闘に賛意を表し、敬意を捧げるものである。且、鉾山工場の各企業體の教育事業及び活動に対する理解ある態度と、熱意の籠つた教育的関心と、支援に対しても、亦ひとしく賛辞を惜しまないものである。更に本町の教育者諸氏が、変替して止まない我が国教育思潮の核心に常に触れんと努力しつゝ、此れを批判し、玩味し、即郷土的、即生活的、体験的教育方針を樹立して、凡ゆる努力と犠牲とを払ひつゝ、教育道の聖戦に闘ひつゝあるのに強く動かされる者である。一言にして之を謂へば、我が日立の教育は、新鮮味あり、活気あり、進展性を其の最も輝やかしい特徴とするものである。彼の忌まはしき陰惨な嚴肅主義的懲罰教育の傾向は、全くその影を潜めてゐる。常に積極的であり、自由であり、統制的であり、具案的であり、且能率的であ

る。又、よく父兄を利用し、経済的背景を重視せる、即社会的・即生活的生きた教育といへよう。

然し乍ら、視角を変へて之を眺める時は、幾多の欠陥と不覚とを暴露するものである。第一に余りに生活的経済的背景を重視し過ぎてゐる懸念がある。教育は生活の為の教育でなければならぬが、教育の理念は、常に高邁なる生活の最高理念と結びつけらる可き事を意識し、生活に陶冶せられつゝも、目標は常に此の理念に定着せしめ、其処に指導原理を把握して進むべきではないかと思ふ。職業教育と謂ひ、労作教育と謂ひ、生活教育と謂ひ、或は郷土教育と謂ふも、之等の目標たるべき理念が、生命の高き永遠に在る事を承認しない限り、何等の意義觀念をも持ち得ないと私は考へる。職業技術其れ自身、労作其れ自身、生活術其れ自身、郷土体験其れ自身を、終局目標とする教育は、眞の意味における職業教育、労作教育、生活教育、郷土教育ではあり得ない。之等の名称にて呼ばれる各種教育は、生命教育の最高理念への到達途上に於ける教育活動の諸相であり、其れ自體では何等存在の理由を持たぬ。教育に社会的への準備訓練の意義のみしか認めないならば、教育の神聖を冒瀆するものであり、教育の権威価値を疑ふものである。父兄が労働者であり、百姓であらうとも、その子弟を同様に労働者に仕上げ、百姓に鍛へ上げなければならぬと言ふ宿命的制約羈絆はない筈だ。寧ろ教育は児童の生活態度の中に未だ琢かざる素玉を見出し、この可能性に磨きをかけて、世に送る愉悦を、味はふ可き特権の行使でなければならぬ。児童の境遇に配慮し、其の志望に着意し、生活環境を考慮に置き、父兄の意志を尊重するは、一見個性教育の如く観ぜられ、甚だ穩健な教育であると考へられるかも知れぬが、更に深く考を致すならば、此れは児童の境遇に支配せられ、無自覚無経験無思慮なる児童の衝動意志に動かされ、生活環境に左右せられ、父兄の便宜に頼る点に於て、明らかに危険なる、弾力性に乏しき、非個性的教育であり、或意味に於て、寂しい他律的盲目的劃一教育であると謂へよう。此の色彩が現代日立の学校教育に濃厚でないこと否定し得ようか。

第二に天才教育を支持助成すべき何等の社会的公共的施設のなきことである。例へば公共公開の図書館設備の絶無なること、英才奨学の経済的後援の完全なるものを認め得ぬこと等である。此れは少なくとも教育的関心を有する識者の齊しく確認する本町教育界の恥づべき不覚であらう。工場内の図書設備に於てすら、一般従業員に公開せず、且私設図書に於ては限定せられたサークルにのみ其の使用を許してゐる有様である。教育の使命は与えられたる生命発展の可能體に出来るだけ伸展の機会と誘因を与へ、教育的手術に依つて精神的畸型不具を矯正し、特長を助長するに在ると考へる時、天才教育に資すべき諸施設の不完備欠如は、悲しむべき事実であらうと思ふ。教養の普及向上、教育の機会均等は、一般教育の発達と成功を意味すると共に、天才教育の将来を明るく暗示するものでなければならぬ。重ねて謂ふ。図書館施設、英才奨学経済施設の完備は、教育王国建設をさせる日立の急務たるを失はないと。

第三に階級的宿命觀の瀰漫である。此れは現在では余程薄らいで来たやうであるが、まだ／＼本町の実態上、深く考慮を致すべきものがある。教育の理想が低級であり、余りに現実的である時、教育の使命が疑はれ、教育の権威が危ぶまれ、教育施設が存在価値が怪しいものとなつて来る。教育は常に超階級的のもの、児童の世界は常に平和な平等觀に培はれるものでなければならぬ。労働者の子弟でも、その決意如何に依り、その奮闘如何に依つて、大学者、大政治家、大実業家たり得るといふ信念と希望とを、この可能性の大なる幼童時代に、強く深く植ゑつける必要を吾人は痛感する。労働者資本家等の別は、固定的階級の別ではない。飽くまで適當なる努力と、止まざる向上心とに依つて打破し移動し得る境遇の差である。境遇には階級の如く明瞭に劃線を以て分ち得る確たる分界はない筈であり、唯漸移的に生活層を構成してゐるに過ぎないのである。故に、子弟に階級的宿命觀を植ゑつける事を飽くまで警戒し、貧富の差は可動的境遇の差である事を納得せしむべきである。今日立に於ける生活層を考へて見よう。農業区にては、地主小作の差こそあれ、此の階級觀念はさ程著しくない。新日立の鉦工業地区に於ては、この觀念は明瞭に認識

し得る程度の事実である。それは所謂『役宅』と『長屋』の対立的存在である。

『役宅』とは町の高地に黒塀にて囲まれた住宅団の称であり、一棟一世帯乃至二世帯で、『長屋』とは、町の低地に露出された一方戸口の一見物置き（一見物置き）の如き住宅団の称で、一棟大体五家族が生活してゐる。前者は鉾山工場の所長・所員の所謂『役員』の住居で、相当な数に昇り、後者は鉾夫・製錬夫・職工等の住居で、何れも鉾山・工場の社宅である。この『役宅』『長屋』の呼称は全く慣習的なもので、古くから『上層インテリ階級』『下層無知階級』の觀念を含むものである。此等は、固定的階級の如き觀を呈し、特に小学校に於ては、教育上深慮すべき問題の一つとされてゐる。而も本町小学校が鉾山・工場の絶大な支持の下に経営せられてゐる以上、無力なる小学校教員のみ力では、到底思い切つた行動が出来ず、本町教育界の一癌をなしてゐる如くである。本町小学校の某訓導の曰く『役宅の子供のゐない学校の教育はやり易い』と。これは何を意味するか。町民の間に瀰漫せる此の忌まはしき階級的偏見は、教育関係者のみの躍起の努力では、容易に排除せられるものではない。此れは直接関係のある鉾山工場側に於ける、児童の清らかなる世界に陰惨な階級的宿命觀念を植ゑつけまいとする、同情に充ちた賢明なる考慮に俟つべきであらう。現にこの階級的觀念を醸成すべき幾多の施設が、両企業体に依つて経営せられてゐるのは、可憐な児童の為に頗る遺憾な事実である。これが鉾山工場の従業員の制圧管理の必然的結果にせよ、又如何に鉾山・工場が町の生活の網であらうとも、聖なる教育の世界に於ては、断じて資本主義的な僭越行動を許す勿れと絶叫したい。本町の教育は、常に資本主義を利用すべきであるが、資本主義に利用せられてはならない。

最後に私は本町小学校に於ける特殊教育の能率的發展を希望するが故に、本町に於て殆ど毎年の如く行はれる職員の大異動に対して一言したいと思ふ。折角町の事情にも通じ、特殊教育の経験も出来、自信もついて来た惜しい訓導達が、当局の便宜の為に事半ばにして異動せられる事は、其の教育的抱負実現の上から言つても、永久的教育施設運用の点から言つても、甚だ遺憾な事実であ

る。特に日立第一校の例を取らんか、最近に於ては、学校長は一年乃至二年間を置いて、常に異動され、父兄の不愉快、児童の不安は蓋し想像以上のものがあらう。即ち昭和三年以降、学校長の変代実に六名の多きに上り、平均在任僅かに一年余に過ぎない。此の短日月の間に、如何にしてその抱懷する教育的抱負計畫（抱負計畫）の実現が出来、郷土教育の徹底を期しようぞ。

以上要言すれば、教育的背景としての經濟的各種条件が、余り重視せられてゐるのではなからうかと懸念し、眞の意味に於ける天才教育の価値の認識を望み、其の社会施設の完備を期待し、次に両企業会社の教育的関心をより合理的に是正して、児童に階級的偏見を植ゑつけざること配慮することを懇望する者である。而して本町教育の理想化、合理化、能率化の為に、特に教員異動に対する当局の態度の、より慎重ならんことを提言するものである。（完）

〈附記〉

本史料に収録されている写真の多くと表8～11は、日立町役場編『日立町勢一覧』（一九三五年七月二五日発行）に掲載されているものである。

■別掲表

表1 日立町戸口の推移

現住戸口累年増加表

年次	戸数	人口		
		男	女	計
明治五年		一〇六二	一〇六一	二一二三
明治三十年	三七四	一一一九	一二一四	二三三三
明治三十六年	三六九	一二八三	一二二八	二四一一
明治四十年	四〇六	一二五一	一三二八	二五七九
大正元年	六四六	二二四五	一七五七	三九〇二
大正五年	一七八〇	五一八三	三八三一	九八二五
大正十年	四七三八	一〇三七五	九八二九	二〇二〇八
昭和元年	五三二四	一二六一	一二〇七二	二四六八三
昭和五年	五六一七	一三九八七	一三五九三	二七五八〇
昭和九年	五八一七	一五八一九	一四六四九	三〇四六八

表2 日立町所在の会社

名 称	創立年月	資本金	従業員数
日本鉱業株式会社日立鉱山事務所	明治38年12月	75,000,000	3,552
株式会社日立製作所日立工場	全 44年7月	20,000,000	9,493
日立電力株式会社	昭和2年10月	5,000,000	
水濱電車株式会社日立営業所	大正2年2月	2,150,000	

表3 日立鉱山第一小学校児童数推移

職員	学級	計	科等高		科常尋		
			女	男	女	男	
三	三	九一	〇	〇	三六	五五	四十年
五	五	二五四	七	一二	八五	一五〇	四十一年
一〇	一〇	三二六	一四	一七	一二一	一八四	四十四年

表4 大正前期日立町小学校就学率推移

元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年
九八・九三	漸次好調	漸次好調	九九・七一	九九・八一	九九・八七	一〇〇・〇〇
男 九九・八五			男 一〇〇・〇〇	男 一〇〇・〇〇	男 一〇〇・〇〇	男 一〇〇・〇〇
女 九八・〇〇	←	←	女 九九・四一	女 九九・六二	女 九九・七三	女 一〇〇・〇〇

表5 大正初期日立第二小学校の児童数推移

職員	学級	計	科等高		科常尋		
			女	男	女	男	
一〇	一〇	三五八	六	一九	一三七	一九六	二年
一七	一四	七二五	六	四〇	三三二	三五七	四年
二三	二一	一二〇〇	三〇	五九	五〇三	六〇八	六年
二七	二七	一五九〇	四三	八一	六八九	七七七	八年

表6 大正中期日立町第二小学校児童数推移

職員	学級	計	科等高		科常尋		
			女	男	女	男	
二七	二七	一五九〇	四三	八一	六八九	七七七	八年
二〇	一九	一二五八	五五	九六	四九三	五一四	十年
一九	一八	一〇六一	六一	九七	四二四	四七九	十一年

表7 大正後期日立町第二小学校児童数推移

職員	学級	計	科等高		科常尋		
			女	男	女	男	
一九	一八	一〇六一	六一	九七	四二四	四七九	十一年
二〇	一八	一一〇六	六四	八六	四六一	四九四	十二年
↓調好下以							

表8 日立町学校一覧 小学校

名 称	創 立 年 月	学 級	教 員	児 童		
				男	女	計
日立第一尋常高等小学校	明治二十二年六月	八	一〇	二二一	二三九	四六〇
日立第二尋常高等小学校	明治四十四年四月	三二	三四	八七二	八二九	一七〇一
日立第三尋常高等小学校	明治四十二年二月	一七	一九	五二一	四九六	一〇一七
日立第四尋常高等小学校	大正五年一月	三〇	三二	九三九	七九三	一七三二
日立第五尋常高等小学校	昭和二年四月	三〇	三二	九三三	八九八	一八三〇

表12 昭和初期日立町第二小学校
児童数推移

職員	学級	計	科等高		科常尋		二年	五年
			女	男	女	男		
二五	二三	一二七九	八一	一〇五	五三七	五七四		
二九	二七	一五三七	九六	一四五	六三八	六五八		

表9 日立町学校一覧 中学校

名 称	創 立 年 月	学 級	教 員	生 徒
茨城県立日立中学校	昭和二年四月	一〇	二三	五〇〇

表11 日立町学校一覧 私設学校

名 称	創 立 年 月	学 級	教 員	生 徒
日立工業青年学校	昭和十年六月	七	四二	三三一
日立鉾山甲種夜学校	明治四十二年九月	八	二四	三二六
日立鉾山乙種夜学校	明治四十二年九月	一	六	六一
第一徳風幼稚園	昭和七年九月	二	三	一一一
第二徳風幼稚園	昭和七年九月	二	三	八三
田端幼稚園	昭和五年九月	二	三	二三

表10 日立町学校一覧 町立青年学校

名 称	創 立 年 月	学 級	教 員	生 徒
日立実業青年学校	大正十五年四月	九	一八	五二五
日立本山工業青年学校	昭和八年四月	六	一〇	二四〇
日立女子青年学校	昭和十年七月	二	三	八〇

表13 日立町尋常科卒業生進路

八 七		八 七		八 七		八 七		八 七		八 七		八 七		全 八年度		昭和七年度							
高等科へ		無職 家事又は		奉公 商業その他		東京へ		上級学校		農業		工場 セメント		日立工場		鉾山病院		鉾山		児童 在籍			
28 29				1												28 30	男	第一校					
25 22			1		2	2										30 22	女						
91 102	1				1 4											93 106	男	第二校					
85 89	7 8	2			3 1				2							95 102	女						
52 46					6 6											58 52	男	第三校					
54 39					5 7											39 46	女						
82 81		1 1			20 7											103 99	男	第四校					
65 91	2 1				23 3											90 95	女						
99 97	2 1	1	1 2	4 1				1								107 102	男	第五校					
80 70	3 5	3	1 4	4 8				4 7								92 97	女						

表14 日立町高等科卒業生進路

八 七		八 七		八 七		八 七		八 七		八 七		八 七		八 七		全 八年度		昭和七年度				
は無職 家事又		奉公 商業その他		東京へ		上級学校		農業		工場 セメント		日立工場		鉾山病院		鉾山		児童 在籍				
		3		3	2	4	5	6	5	4		3					28	12	男	農業区	第一校	
		4	1	3	1			5	6			7	5	2	1		30	14	女			
34	25	4	6		6	2	1	3	5*			1				26	20	93	63	男	鉾山区	第二校
5	3		2	1	1	1			2			8	16	3	3	16	16	95	43	女		
5		1	3	3	9	3	4					9	12			10	17	58	45	男	製錬鉾区	第三校
2	1				2	1	1					18	17		5	4		39	26	女		
	30	11	3	5	5	9	17					14	8			5	5	103	68	男	鉾山区	第四校
13	17		1		4	9	7					17	24	3				90	53	女		
13	3	8	5	15	14	16						6				16	5	107	27	男	商業区	第五校
7	2			5	1	4	1					34	8	5		3		92	12	女		

表15	日立町第五小学校高等科二年生職業体験実習状況	実習先	一	二	三	四
			鉾山	工場	商店	ミシン教習所
			一四	三五	五	五四
			*一四	三五	四	五三
		計	二八	七〇	五	四

表 15 日立町第五小学校高等科二年生職業体験実習状況

計	女中	三越裁縫部	美容院	中等学校	商店	町工場	工場女工	工場女事務手	工場小使	日立工業専修青年学校	鉾山	就職先	就職人員		
六七				四	一六	一四			六	一二	一五	男	就職人員	計	
五五	一	二	一	五			三三	四			九	女			
一二三	一	二	一	九	一六	一四	三三	四	六	一二	二四				

表 16 日立町第五小学校高等科卒業生就職状況